近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ

伊坂城跡（第４次）・中野山遺跡（第４次・第５次）
北山Ａ遺跡（第２次）・筆ヶ崎古墳群（第２次）ほか

中野山遺跡縄文時代早期炉穴

２０１２（平成２４）年

三重県埋蔵文化財センター

ＳＦ1016・ＳＦ1022（東から）

ＳＦ1015（北東から）

ＳＦ1010断面（南から）

ＳＦ1010底石検出状況（南から）

ＳＨ1025・1009（南から）

調査区全景（南から）

ＳＨ２（南から）

例　言

1　本書は、三重県四日市市伊坂町から鈴鹿市小岐須町にかけて点在する、伊坂城跡（第４次）・中野山遺跡（第４次・第５次）・北山Ａ遺跡（第２次）・筆ヶ崎古墳群（第２次）、中野山遺跡・北山Ａ遺跡・北山Ｃ遺跡・黒土遺跡・筆ヶ崎古墳群・北山城跡・小牧南遺跡・釜垣内遺跡・小社遺跡（以上、一次調査）にかかる発掘調査の概要報告である。

2　上記の発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

3　調査は、下記の体制で実施した。

委託者　　中日本高速道路株式会社

受託者　　三重県

調査主体　三重県教育委員会

［平成22年度］

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ⅱ課（四日市整理所）

主幹　服部芳人・穂積裕昌　　主査　杉野直也・岩脇成人・鈴木規之・山田猛

主事　勝山孝文・東谷洋平　　技師　萩原義彦・石井智大・川部浩司・櫻井拓馬

遺跡名（調査次）	面積	調査期間	担当者	現地作業
中野山遺跡(第一次)	1,530㎡	H22.11.26～H23.3.10	川部・岩脇・山田	株式会社アート
北山Ａ遺跡(第一次)	950㎡	H22.11.26～H23.3.10	川部・岩脇・山田	株式会社アート
黒土遺跡（第一次）	580㎡	H22.8.9～H22.9.30	石井・鈴木・東谷	西武緑化有限会社
伊坂城跡(第４次)	990㎡	H22.8.9～H23.1.14	杉野・穂積・櫻井	丸文工業株式会社
北山Ａ遺跡（工事立会）	100㎡	H23.1.18	穂積・石井	（労務提供）

［平成23年度］

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ⅱ課（四日市整理所）

主幹　服部芳人・穂積裕昌　　主査　岩脇成人・鈴木規之・中村法道・山田猛

主事　東谷洋平　　技師　石井智大・櫻井拓馬

遺跡名（調査次）	面積	調査期間	担当者	現地作業
北山Ａ遺跡(一次)	500㎡	H23.11.7～H24.1.10	岩脇・穂積	橋本技術株式会社
北山Ｃ遺跡（一次）	600㎡	H23.7.11～H23.9.9	鈴木・石井	西武緑化有限会社
黒土遺跡（一次）	380㎡	H23.8.17～H23.8.26	櫻井	株式会社島田組
中野山遺跡（一次）	880㎡	H23.8.24～H24.1.13	東谷・穂積・山田	安西工業株式会社
北山城跡（一次）	630㎡	H23.11.7～H24.1.10	岩脇・穂積	橋本技術株式会社
筆ヶ崎古墳群(一次)	560㎡	H23.9.20～H24.1.31	石井・中村	株式会社イビソク
小牧南遺跡（一次）	460㎡	H24.3.1～H24.3.7	穂積・中村	労務提供
釜垣内遺跡（一次）	2,300㎡	H23.10.24～H24.2.17	鈴木・櫻井	株式会社島田組
小社遺跡（一次）	1,020㎡	H23.10.24～H24.2.17	鈴木・櫻井	株式会社島田組
北山Ａ遺跡（第２次）	3,760㎡	H23.4.25～H23.12.22	岩脇・櫻井	株式会社島田組
中野山遺跡（第４次）	4,000㎡	H23.4.25～H23.12.22	穂積・中村・山田・櫻井	株式会社島田組
中野山遺跡（第５次）	2,400㎡	H23.8.24～H24.1.13	東谷・穂積・山田	安西工業株式会社
筆ヶ崎古墳群(第２次)	750㎡	H23.9.20～H24.1.24	石井・中村	株式会社イビソク

4　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の諸先生・諸氏にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

（22年度）中井均　中野晴久　堀木真美子

（23年度）泉拓良　山田昌久　工藤雄一郎　渋谷綾子　久保勝正（順不同・敬称略）

5　本書で示す方位はすべて座標北で示している。なお、これまでの調査の経緯から、伊坂城跡は日本測地系を用いたが、その他の遺跡は世界測地系を用いている。

6　本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＦ：煙道付炉穴・集石炉

ＳＸ：墓　　ＳＺ：不明遺構　　Ｐｉｔ・Ｐ：ピット・柱穴

本 文 目 次

1　前言 ……（服部）……1
2　伊坂城跡（第４次）……（櫻井）……5
3　中野山遺跡（第４次）……（中村・櫻井）……7
4　中野山遺跡（第５次）……（東谷・山田・穂積）……11
5　北山Ａ遺跡（第２次）……（櫻井）……15
6　筆ヶ崎古墳群（第２次、一次）……（石井）……18
7　北山Ｃ遺跡（一次）……（鈴木）……24
8　黒土遺跡（一次）……（東谷）……25
9　北山Ａ遺跡（一次）……（岩脇）……26
10　中野山遺跡（一次）……（東谷）……28
11　北山城跡（一次）……（岩脇）……30
12　小牧南遺跡（一次）……（中村）……32
13　釜垣内遺跡（一次）……（鈴木）……33
14　小社遺跡（一次）……（鈴木）……35

写 真 目 次

表紙（表）　中野山遺跡縄文時代早期炉穴
表紙（裏）　筆ヶ崎古墳群ＳＨ２鍛冶炉
巻頭図版１（中野山遺跡第４次）
ＳＦ1016・ＳＦ1022、ＳＦ1015、ＳＦ1010断面、ＳＦ1010底石検出状況、ＳＨ1025・1009
巻頭図版２（筆ヶ崎古墳群第２次）
調査区全景、ＳＨ２
２　伊坂城跡（第４次）
写真１　斜面部トレンチ全景……5
写真２　谷部トレンチ全景……5
４　中野山遺跡（第５次）
写真３　ＳＦ1114・1115・1116・1125……13
写真４　ＳＦ1125……13
写真５　ＳＨ1104遺物出土状況……13
写真６　ＳＨ1103……14
写真７　ＳＨ1103出土遺物……14
写真８　ＳＨ1108……14
５　北山Ａ遺跡（第２次）
写真９　ＳＸ136……17
写真10　ＳＢ110……17
写真11　ＳＨ６……17
写真12　ＳＨ73……17
写真13　ＳＫ86……17
写真14　ＳＫ68……17
６　筆ヶ崎古墳群（第２次・一次）
写真15　２号墳周溝内土器出土状況……20
７　北山Ｃ遺跡（一次）
写真16　トレンチ４……24
８　黒土遺跡（一次）
写真17　平成23年度トレンチ５……25
９　北山Ａ遺跡（一次）
写真18　平成22年度トレンチ２……27
写真19　平成22年度トレンチ10……27
10　中野山遺跡（一次）
写真20　平成22年度トレンチ16……28
写真21　平成23年度トレンチ９……28
写真22　平成23年度トレンチ12……28
11　北山城跡（一次）
写真23　トレンチ６……31
写真24　トレンチ９……31
写真25　トレンチ８全景……31
写真26　北山城跡全景……31
12　小牧南遺跡（一次）
写真27　トレンチ６……32
13　釜垣内遺跡（一次）
写真28　トレンチ７……33

写真29　トレンチ17……33
写真30　トレンチ13……33
14　小社遺跡（一次）
写真31　トレンチ６……35
写真32　トレンチ４……35
写真33　トレンチ５……35

挿　図　目　次

１　前言
図１　路線内の遺跡位置図……３
２　伊坂城跡（第４次）
図２　調査区位置図……６
図３　遺構平面図……６
３　中野山遺跡（第４次）
図４　調査区位置図（北山Ａ遺跡含む）……８
図５　遺構平面図……８
図６　縄文時代早期の遺構……９
図７　主要炉穴実測図……９
図８　縄文土器実測図……10
４　中野山遺跡（第５次）
図９　南区遺構配置図……11
図10　北区遺構配置図……12
図11　ＳＦ1125実測図……13
図12　押型文土器実測図……13
図13　ＳＨ1104実測図……13
図14　ＳＨ1104出土遺物実測図……13
図15　ＳＸ1109実測図……14
図16　ＳＸ1109出土遺物実測図……14
図17　ＳＨ1108実測図……14
５　北山Ａ遺跡（第２次）
図18　遺構平面図……16
６　筆ヶ崎古墳群（第２次・一次）
図19　調査区全体図……18
図20　ＳＨ２出土須恵器……21
図21　トレンチ配置図……22
７　北山Ｃ遺跡（一次）
図22　トレンチ１・４の遺構平面略図……24
図23　トレンチ配置図……24
８　黒土遺跡（一次）
図24　トレンチ配置図……25
９　北山Ａ遺跡（一次）
図25　トレンチ配置図……26
10　中野山遺跡（一次）
図26　トレンチ配置図……29
11　北山城跡（一次）
図27　トレンチ配置図……30
12　小牧南遺跡（一次）
図28　トレンチ配置図……32
13　釜垣内遺跡（一次）
図29　トレンチ配置図……34
14　小社遺跡（一次）
図30　トレンチ配置図……36

表　目　次

１　前言
表１　近畿自動車道名古屋神戸線埋蔵文化財発掘調査経過表……２
表２　普及公開活動一覧……４
表３　発掘調査ニュース刊行一覧……４
３　中野山遺跡（第４次）
表４　縄文時代遺構一覧……９
４　中野山遺跡（第５次）
表５　南区掘立柱建物一覧……11
５　北山Ａ遺跡（第２次）
表６　古代の竪穴住居一覧……15
９　北山Ａ遺跡（一次）
表７　一次調査結果一覧……27
11　北山城跡（一次）
表８　一次調査結果一覧……31
13　釜垣内遺跡（一次）
表９　トレンチ一覧……34
14　小社遺跡（一次）
表10　トレンチ一覧……36

1　前　言

1．はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市JCT～亀山西JCTにかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成20年度から実施している。

平成20年度と平成21年度に実施した発掘調査の概要は、『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』[1]　として、また、平成20年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と平成21年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡の第５次の結果については『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』[2]　として、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

現在、伊勢湾岸自動車道（豊田東JCT～四日市JCT）と新名神高速道路（亀山JCT～草津JCT）が開通しており、その間に挟まれるように南北に走る東名阪自動車道の交通量が増加している。特に、四日市IC周辺は土日・祝日などに非常に激しい渋滞が発生している状況である。その解消などを目的に、四日市JCT～亀山西JCTの開通が望まれており、四日市JCT～四日市北JCT間は平成27年度末、四日市北JCT～亀山西JCT間は平成30年度末に供用開始が計画されている。また、四日市北JCTから北方向へ接続する東海環状自動車道の東員ICまでの供用開始も平成27年度末に計画されており、特にこの周辺を中心に用地買収が進められている状況である。

2．平成22年度の概要

現地調査業務　年度当初の計画としては、伊坂城跡の他２遺跡の二次調査（計18,000㎡）と、中野山遺跡の他６遺跡の一次調査（計4,000㎡）に加えて、筆ヶ崎古墳群の地形測量を行う予定であった。しかしながら、用地の買収が思うように捗らなかったことに加えて、中野山遺跡周辺には絶滅危惧種であるオオタカが営巣するなど、発掘調査を行うための条件整備が整わない状況であった。その結果、二次調査は伊坂城跡の１遺跡（990㎡）、一次調査も中野山遺跡の他３遺跡（3,110㎡）に加え、北山Ａ遺跡の東側で仮設道路建設に伴う工事立会い（100㎡）の合計4,150㎡を実施したに止まった。

なお、年度の途中に、鈴鹿市山本町内で鈴鹿PAの計画が提示されたため、建設予定地周辺の分布調査を行った。その結果を含めて『近畿自動車道名古屋神戸線（新名神）四日市JCT～亀山西JCT）建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅴ』2011.5を作成した。この調査の結果、鈴鹿PAの計画予定地には、山本町字高ノ瀬及び字折子地内で遺物の散布が認められ、高ノ瀬遺跡と折子遺跡として２遺跡が新規に登録され、発掘調査の対象に組み入れられた。

室内業務　調査を行った各遺跡の出土遺物や図面・写真などの資料整理作業に加え、前述の『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』を平成22年7月に、『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』を平成23年３月に作成、刊行した。

3．平成23年度の概要

現地調査業務　昨年度に比べて、全体的には用地買収が進み、当初の計画としては、伊坂城跡の他３遺跡の二次調査（計9,500㎡）、北山Ｃ遺跡の他10遺跡の一次調査（計8,500㎡）、合計18,000㎡が予定された。今年度は、用地買収の進捗を踏まえて、発掘調査計画を確認しあう定例会を、各工事区と三重県高速道北勢プロジェクトを交えて、概ね２ヶ月に１回定期的に開催した。今年度は、結果的には、伊坂城跡など一部の遺跡で、用地買収が進まなかったが、二次調査を計10,910㎡、一次調査を計7,330㎡、合計すると18,240㎡と、ある程度計画通りの発掘調査を実施することができた。また、筆ヶ崎古墳群については、今年度の二次調査以外に現存する古墳群の調査前地形測量も実施した。

室内業務　調査を行った各遺跡の出土遺物や図面・写真などの資料整理作業に加え、平成21年度に調査を実施した伊坂城跡の成果を『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』[3]　として、平成24年３月に作成・刊行した。

表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

No.	遺跡名	所在地	種別	事業地内面積	平成20年度 一次調査 二次調査	平成21年度 一次調査 二次調査	平成22年度 一次調査 二次調査	平成23年度 一次調査 二次調査	遺跡別調査合計面積	備　　考
1	いきか いきかかま 伊坂遺跡・伊坂窯跡	四日市市伊坂町	集落跡・生産遺構	3,950	42 800	3,150			42 3,950	平成２１年度で、二次調査終了。
2	いさかじょう 伊坂城跡	四日市市伊坂町	城館跡	25,000		6,000	2,500		0 8,500	平成２１年度（二次調査・第３次）：実質掘削面積４，４９０㎡ 平成２２年度（二次調査・第４次）：実質掘削面積９９０㎡
3	きたやまし一 北山C遺跡	四日市市西大鐘町 桑名市志知ほか	集落跡	7,500				600	600 0	平成２３年度で、一次調査終了。要二次調査面積確定。
4	のなか 野中遺跡	四日市市北山町	包蔵地	13,000					0 0	一次調査未実施。遺跡名称を黒土遺跡から錯誤のため変更。
5	くろぼく 黒土遺跡	四日市市北山町	包蔵地	11,000			580	380	960 0	平成２２・２３年度の２ヶ年で一次調査を実施し、遺構・遺物とも確認できず、二次調査の必要なしと判断。遺跡名称を野中遺跡から錯誤のため変更。
6	きたやまえー 北山A遺跡	四日市市北山町	包蔵地	19,000			950 100	500 3,760	1,450 3,860	平成２２・２３年度の２ヶ年で一次調査終了。要二次調査面積確定。
7	なかのやま 中野山遺跡	四日市市北山町	包蔵地	38,000			1,530	880 6,400	2,410 6,400	平成２２・２３年度の２ヶ年で一次調査終了。要二次調査面積確定。
8	ふちがさ 筆ヶ崎古墳群	四日市市小牧町	古墳	11,650				560 750	560 750	平成２３年度で、一次調査終了。要二次調査面積確定。
9	きたやまじょう 北山城跡	四日市市北山町	城館跡	16,000				630	630 0	平成２３年度で、一次調査終了。要二次調査面積確定。
10	いばやし 居林古墳群	四日市市北山町	古墳	－					0 0	北山城跡の範囲内に存在。
11	こまきかなみ 小牧南遺跡	四日市市小牧町	包蔵地	15,000				460	460 0	平成２３年度に、一次調査を実施。但し、一次調査が必要箇所が残存。
12	なかのひらこ 中野平古遺跡	四日市市中野町	包蔵地	6,000					0 0	一次調査未実施。
13	のぞえごはんやま 野添御飯山古墳	菰野町川北	古墳	1,000					0 0	一次調査未実施。
14	むくのき 椋ノ木遺跡	菰野町池底	散布地	14,000					0 0	一次調査未実施。
15	おおくぼ 大久保遺跡	菰野町潤田	集落跡	11,000					0 0	一次調査未実施。
16	すずやま 鈴山遺跡	菰野町音羽	散布地	8,000					0 0	一次調査未実施。
17	おおまつ 大松遺跡	鈴鹿市大久保町	包蔵地	2,100					0 0	一次調査未実施。
18	たかのせ 高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	包蔵地	33,600					0 0	一次調査未実施。
19	おりこ 折子遺跡	鈴鹿市山本町	包蔵地	13,500					0 0	一次調査未実施。
20	ひがしあらの 東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	包蔵地	4,900					0 0	一次調査未実施。
21	こやしろ 小社遺跡	鈴鹿市小社町	包蔵地	12,000				1,020	1,020 0	平成２３年度に、一次調査を実施。但し、一次調査が必要箇所が残存。
22	かまがいと 釜堀内遺跡	鈴鹿市小岐須町	包蔵地	30,000				2,300	2,300 0	平成２３年度に、一次調査を実施。但し、一次調査が必要箇所が残存。
年度別調査合計面積				296,200	42 842	800 9,150	3,060 2,600 5,660	7,330 10,910 18,240	10,432 23,460 33,892	（表中の数値の単位は、すべて㎡）

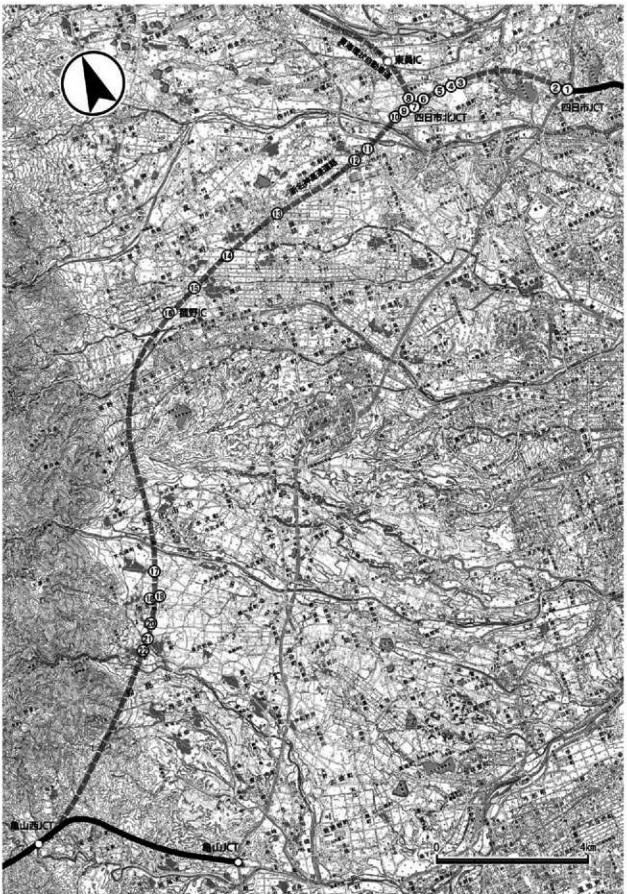


図1　路線内の遺跡位置図（1：100,000）

4．普及公開活動

発掘調査の成果などについて、広く一般の方に知っていただくために、様々な方法で普及公開活動を行った（表２・表３）。

平成22年度は、二次調査を行ったのが、伊坂城跡だけで、しかも現地が急峻な地形ということもあって、現地での発掘調査説明会は開催しなかった。しかし、出前講座として、北山町自治会と三重県立北星高校へ出向き、発掘調査ニュースは２回、№２と№３を発行した。

平成23年度は、現地での発掘調査説明会を10月（中野山遺跡第４次・北山Ａ遺跡第２次）と、12月（筆ヶ崎古墳群第２次）の２回行った。その説明会資料として発掘調査ニュースの№４と№５を発行した。また、年度末の３月には下野地区市民センターにおいて、地元向けに平成23年度の発掘調査成果説明会を催し、約30名の参加があった。また、今年度も、地元の八郷の遺跡を守る会の整理所見学や、三重県立北星高校や保々地区歴史を語る会への出前講座を行うなど、様々な依頼を受ける行事も多くなりつつある。

註

1）三重県埋蔵文化財センター2010『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』

2）三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』

3）三重県埋蔵文化財センター2012『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』

内　容	所在地・会場	開　催　年　月　日	参加人数	備　　考
北星高校 出前講座	県立北星高校	平成21(2009)年１月18日(日)	30名	
伊坂窯跡 遺跡見学会	伊坂窯跡	平成21(2009)年３月３日(火)	30名	地元住民・小学校児童
伊坂遺跡 ふれあいフェスタ・歴史ウォーキング	伊坂遺跡	平成21(2009)年11月22日(日)	100名	地元自治会主催
発掘調査成果説明会	八郷地区市民 センター	平成22(2010)年３月７日(日)	50名	
八郷の遺跡を守る会 整理所見学	四日市整理所 倉庫	平成22(2010)年５月７日(金)	８名	
北星高校 出前講座	県立北星高校	平成23(2011)年１月16日(日)・20日(木)	40名(16日) 30名(20日)	
北山町自治会 出前講座	北山町公民館	平成23(2011)年３月24日(木)	20名	
中野山遺跡(第４次)・北山Ａ遺跡(第２次) 現地説明会	四日市市北山町	平成23(2011)年10月２日(日)　10時～15時	320名	東環中野山遺跡第３次と同時開催
八郷の遺跡を守る会 整理所見学	四日市整理所 倉庫	平成23(2010)年11月29日(火)	８名	
筆ヶ崎古墳群第２次 現地説明会	四日市市小牧町	平成23(2011)年12月３日(土)　14時～16時	110名	
北星高校 出前講座	県立北星高校	平成24(2012)年１月19日(木)・22日(日)	18名(19日) 33名(22日)	
発掘調査成果説明会	下野地区市民 センター	平成24(2012)年３月４日(日)　14時～16時	30名	
保々地区歴史を語る会 出前講座	保々地区市民 センター	平成24(2012)年３月17日(土)　13時～15時	45名	

表２　普及公開活動一覧

NO.	発　行　年　月	備　　考
NO. 1	平成22(2010)年１月	
NO. 2	平成22(2010)年８月	
NO. 3	平成23(2011)年１月	
NO. 4	平成23(2011)年10月	中野山遺跡（第４次）・北山Ａ遺跡（第２次）現地説明会資料
NO. 5	平成23(2011)年12月	筆ヶ崎古墳群（第２次）現地説明会資料
NO. 6	平成24(2012)年３月	発掘調査成果説明会（３／４）で配布
NO. 7	平成24(2010)年３月	

表３　発掘調査ニュース刊行一覧

2　伊坂城跡（第４次）

１．はじめに

伊坂城跡は、朝日丘陵の南端に位置する戦国時代の城館跡である。当遺跡は、現在の里道を境として、主郭や櫓台などの主要な防御施設が密集する狭義の城域（遺跡北半）と、土塁や堀切を伴う屋敷地（遺跡南半）に２分することができる。遺跡の南半を対象とした既往の調査では、古墳時代、戦国時代の遺構・遺物などを確認している[1]。

今回の調査は、遺跡北半を対象とした初めての調査である。調査地は狭義の城域の南東端にあたり、尾根上に数個の小さな平坦面がみられる[2]。この平坦面の実態解明を目的として丘陵斜面に調査区を設定した。また、丘陵の裾をめぐる堀の有無を確認するため、谷部にも調査区を設けた。

２．遺構

（１）斜面部

表土を除去し、地山上で遺構検出を試みたが、遺構は確認できなかった。また、各平坦面を断ち割り、土層の確認を行ったところ、切岸や盛土の痕跡は認められず、流出土の堆積や風倒木による地形の変化により平坦面が形成されたと考えられた。

（２）谷部

堀などの遺構は検出されなかった。断ち割りの結果、谷部の平坦地は、断続的な丘陵流出土の堆積によって形成された自然地形であることがわかった。

なお、遺跡外側にむかって筋状に配置したトレンチでは、表土下にシルトや粗砂などが厚く堆積しており、地表下約2.3mで極めて軟弱なグライ層となった。各層を精査したが、遺構・遺物はなかった。この状況から、中世以前の谷部は低湿な環境であったと推測される。

３．遺物

斜面部・谷部とも、表土中に数点の中世の土器・陶磁器がみられるのみであった。なお、平坦面１の下層で、古代以前の土師器・須恵器が出土したことは特筆される。遺跡北半の丘陵上においても、古墳時代の遺構が広がっている可能性が高い。

４．まとめ

今回の調査では、伊坂城に関連する遺構や作事は確認できなかった。ただし、このような自然地形を城に取り込み、曲輪や通路として利用していた可能性は否定できない。隣接地の調査結果なども踏まえた上で、当調査地の性格付けを行う必要があろう。

今後も、現状の地形や既往の縄張り図の検証作業を進め、伊坂城の実態を明らかにしていきたい。

註

1）三重県埋蔵文化財センター2003『伊坂城跡発掘調査報告』、同2012『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』

2）伊藤徳也1997「北伊勢における中世城郭の現況」『研究紀要』第６号　三重県埋蔵文化財センター

写真１　斜面部トレンチ全景（北東から）

写真２　谷部トレンチ全景（北から）

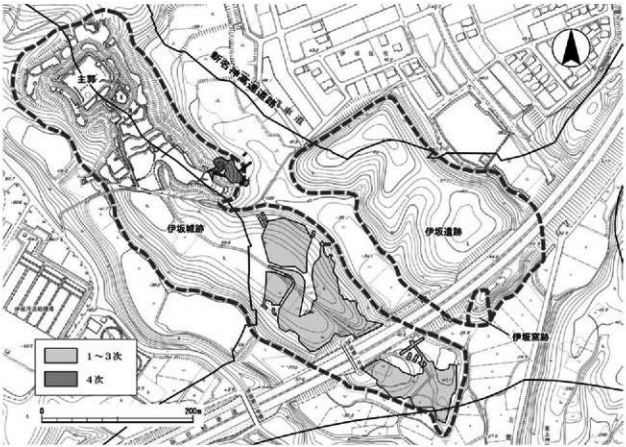


図２　伊坂城跡調査区位置図（１：5,000、縄張図は註２文献による）

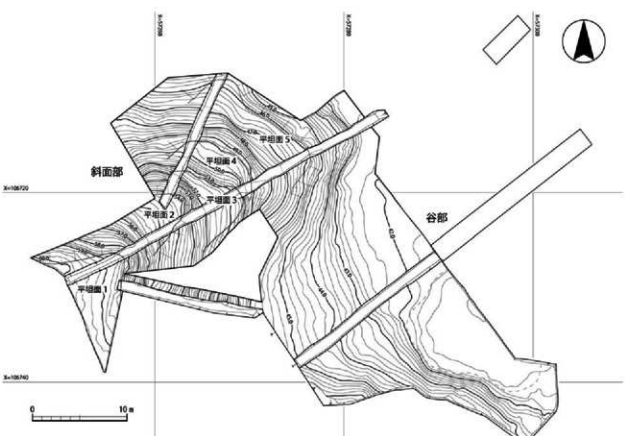


図３　遺構平面図（１：400、座標は日本測地系準拠）

3　中野山遺跡（第４次）

１．はじめに

中野山遺跡は、四日市市北山町に所在する。当地は近畿自動車道名古屋神戸線（新名神高速道路）から東海環状自動車道が分岐する四日市北JCT部分にあたるため、調査は両事業ごと、新名神調査区と東海環状調査区に分けて行っている（図４）。新名神道建設に関わる調査として実施したのは、今回報告する第４次・第５次調査である。

第４次調査区は遺跡の東側に位置する。現地表下約40cmで当地の地山に達し、当該面上ですべての遺構を検出した。

２．遺構

（１）縄文時代早期の遺構

竪穴住居４基と炉穴22基を確認した（図６・表４・巻頭図版１）。当該期の遺構は調査区北西に集中し、古代の遺構分布とは著しい対照をなしている。隣接する第５次調査区と同様、中野山遺跡北側の小規模な谷の付近に遺構が集中する可能性が高い。

竪穴住居　直径３～４mの浅い皿状の落ち込みである。削平のためか、垂木穴は検出できなかった。

炉穴　煙道付炉穴と集石炉の２種がある。遺構の切り合いによれば、集石炉には煙道付炉穴・竪穴住居よりも新しいものが認められる。

①煙道付炉穴　19基確認した。煙道部が細くすぼまる典型的な煙道付炉穴のほか、全長が短く楕円形を呈するものや、煙道部と開放部の幅がほぼ等しく、両者の区別が難しいものがある。こうした形態の差は炉穴の時期差を反映している可能性があろう。いずれの炉穴とも、５～10cmの被熱層が形成され、地山の粘質土が赤変硬化している。

炉の主軸方位は北東－南西を指向するが、煙道の推定開口方向は一定でない。なお、本調査区の炉穴では、煙道の天井部は検出されなかった。

②集石炉　３基ある。礫の法量・用法で２分できる。

Ａ類（ＳＦ1022・ＳＦ1023）：拳大礫のみを用いるもの。土坑の底面が被熱する。

Ｂ類（ＳＦ1010）：底に大型礫や石皿状の扁平な礫を４～５個敷き、上部に拳大礫を充填するもの。第３次調査に多いタイプである。底石の上面が被熱し、掘形の底面は被熱しない。また、埋土に炭化材が多く残る点や、埋土が漆黒色を呈する点も特筆される。

炭化材の年代測定　工藤雄一郎氏（国立歴史民俗博物館）、（株）パレオ・ラボに委託し、炉穴底面で採取した炭化材を^{14}C年代測定（ＡＭＳ法）に供した。その結果、煙道付炉穴では9300～9200yrBP、集石炉は9300～8800yrBPの^{14}C年代が得られた（表４）。既往の測定データによれば、大川式～山形文盛行期にあたる測定値であり[1]、年代の幅がある。なお、集石炉Ａ類の測定値はやや新しく、遺構の切り合いや出土土器の様相とも整合的である。また、樹種同定の結果、炉穴の燃料材にはコナラ・クリ等の広葉樹類が多用されていることが判明した。

（２）弥生時代の遺構

調査区の北部や東部で竪穴住居１棟（ＳＨ1026）、土坑１基（ＳＫ1027）、溝１条（ＳＤ1042）を確認した。当該期の遺構は寡少であり、集落の面的な広がりは認められない。これら遺構の時期は中期中葉に限定され、短期的な居住地として当地を利用していた様子がうかがえる。

（３）古代の遺構

飛鳥～奈良時代の竪穴住居６棟と掘立柱建物21棟、大型土坑７基を確認した。当該期の遺構は調査区南西に集中しており、集落はさらに南側へ広がると予想される。竪穴住居のなかには焼失住居と推測されるものがある（ＳＨ1011）。掘立柱建物は、総柱建物・側柱建物の双方が認められ、比較的大型の柱穴をもつＳＢ1072が調査区南端で検出された。ＳＫ1061は当遺跡に特徴的な大型土坑で、鞴羽口が出土した。しかし、鍛冶炉の検出には至っておらず、鍛冶工房の所在は明らかにできなかった。

３．遺物

ここでは、縄文時代早期の出土遺物について概観する。遺物の出土量は少なく、コンテナ数箱にとど

図4　中野山遺跡調査区位置図（1：5,000、北山A遺跡を含む）

図5　遺構平面図（1：500）

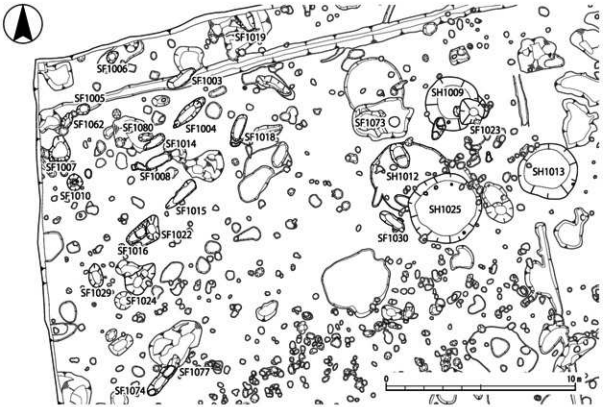


図6　縄文時代早期の遺構（1：200）

遺構名	種別	法量(m)			^{14}C年代
		長	幅	深	(yr BP±1σ)
SF1003	焼道付炉穴	1.6	0.6	0.4	9315±30
SF1004	焼道付炉穴	2.3	0.7	0.3	
SF1005	焼道付炉穴	0.8	0.5	0.15	
SF1006	焼道付炉穴	1.3	0.5	0.3	
SF1007	焼道付炉穴	1.3	0.8	0.25	
SF1008	焼道付炉穴	1.4	0.5	0.4	9310±30
SF1010	集石炉Ⅱ（B）	0.8	0.7	0.3	9350±30
SF1014	焼道付炉穴	1.3	0.5	0.3	
SF1015	焼道付炉穴	2.0	0.5	0.4	9210±35
SF1016	焼道付炉穴	1.2	0.7	0.4	9340±35
SF1018	焼道付炉穴	1.4	0.5	0.4	9360±35
SF1019	焼道付炉穴	－	0.6	0.4	
SF1022	集石炉Ⅱ（A）	1.1	0.7	0.5	9075±30
SF1023	集石炉Ⅱ（A）	1.1	1.0	0.7	8880±30
SF1024	焼道付炉穴	2.0	0.9	0.4	
SF1029	焼道付炉穴	1.3	0.8	0.4	
SF1030	焼道付炉穴	1.5	0.6	0.5	9335±35
SF1062	焼道付炉穴	1.2	0.5	0.2	9235±30
SF1073	焼道付炉穴	－			
SF1074	焼道付炉穴	1.6	0.6	0.5	
SF1077	焼道付炉穴	－	0.7	0.3	
SF1080	焼道付炉穴	－		－	
SH1009	竪穴住居	2.6	－	0.2	
SH1012	竪穴住居	4.0	－	0.1	
SH1013	竪穴住居	3.0	－	0.15	
SH1025	竪穴住居	3.7	－	0.15	

表4　縄文遺構一覧

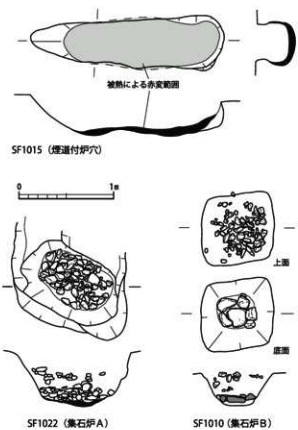


図7　主要炉穴実測図（1：40）

まっている。

押型文土器（図８）　大川式の新相から神並上層式までのものが出土している。神並上層式のものが多いが、土器は特定の遺構に集中しており、必ずしも遺構群全体の時期を示すものではない。

１は浅い斜格子目文、２はやや崩れた市松文を施す。３は格子目文で薄手のもの。４～７はＳＦ1016最上層、８～９はＳＦ1022の遺物である。ＳＦ1016はＳＦ1022に切られているが、土器の時期差は看取されない。当資料は、両遺構廃絶後の浅い凹みに廃棄された土器群であろう。４は口縁部片で矢羽状の押型文がみられる。６は小振りの格子目・斜格子・山形文を組み合わせるもので、奈良県桐山和田遺跡２群Ｃ２類[2]に類する。７は３条単位の粗い山形文を縦横に施文する。８～10は山形文。９・10は原体を縦走させ、横位の山形文を施す。11～13はＳＨ1025出土遺物で、11は口縁部の山形文が体部へと連続している。12・13は、ごく浅い山形文等を帯状に施文し、広い無文帯を有する。

石器　本遺跡では、尖頭器や刃器の出土量が非常に少なく、礫器や磨石・石皿等の植物性食料調理具が卓越している。こうした石器組成の特徴は、炉穴の機能や利用と関連する可能性があり、今後検討を要するだろう。

４．まとめ

今回の調査によって、中野山遺跡が三重県有数の縄文早期の遺跡であること判明した。炉穴の出土数は今年度調査（第３～５次）で66基に達し、三重県最多の事例となった。遺構の分布は谷の付近に集中する可能性が高く、水場や狩猟・採集の場として谷を利用していたものと推測される。このように、本遺跡は生業と遺跡形成との関係性を追及できる良好な遺跡であり、かつ、広範囲の調査によってその全容を明らかにしうる稀有な例である。なお、出土土器の型式や^{14}Ｃの測定値には幅があり、遺構・遺物の内容には県内の既往の調査例と異なる要素が認められる。今後、時期差や地域差の把握が重要な課題となろう。

弥生時代には遺構が希薄となり、古代に至るまで集落は形成されなかったと考えられる。

古代の遺構については、調査区南西で多数の竪穴住居や掘立柱建物を確認したことから、南側の未調査地にも飛鳥～奈良時代の集落が広がると推測される。また、本調査区でも鉄滓や鞴羽口などが出土し、鉄器生産が行われていたとみられるが、鍛冶関連遺構の検出は今後の課題である。中世以降は、火葬穴ＳＫ1039・ＳＫ1040の検出のみに留まり、現代に至るまで生活の痕跡は希薄となる。

註

1）遠部慎2011「西日本における押型文土器群の年代とその環境」『押型文土器期の諸相』（第12回関西縄文文化研究会資料）

2）奈良県立橿原考古学研究所2002『桐山和田遺跡』

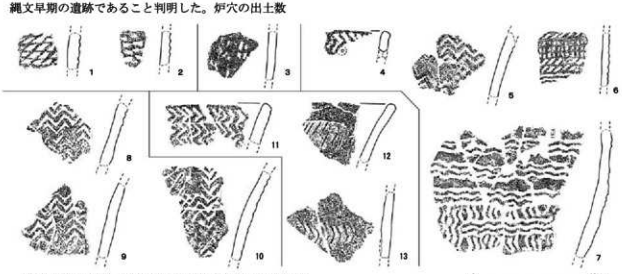


図８　縄文土器実測図（１：３）

4　中野山遺跡（第５次）

中野山遺跡の第５次発掘調査は、調査区を南区（1,600㎡）と北区（800㎡）の２箇所に分けて実施した（図４参照）。

１．南区の調査

平成22年度及び23年度の東海環状自動車道調査区（第２次調査及び第３次調査区）に南接する調査区である。北西側は調査区北側の谷の落ち込みに続く。

掘立柱建物　古代の掘立柱建物を10棟確認した。このうち、ＳＢ1189は中野山遺跡の掘立柱建物のなかで最大である。北側のＳＢ1188と南側のＳＢ226（第２次調査区で大半を確認）を合わせた３棟等の一群はＮ10°Ｅの方位をとる。このほかに、東偏16度と20度、34度のものがある。また、ＳＢ1190は竪穴住居ＳＨ1164を切って建てられており、竪穴住居から掘立柱建物への転換が図られている。

掘立柱建物のデータを表５として掲げておく。

竪穴住居　ＳＨ1164の１棟が確認された。東西5.6ｍ×南北5.6ｍの正方形を呈するらしく、東壁中央に竈をもつ。竈の残りは悪い。埋土から７世紀代の土器が出土した。

土坑　大小のものが存在し、いずれも性格不明である。ＳＫ1161とＳＫ1165、ＳＫ1167の３基は略円形もしくは楕円形を呈した大型の土坑である。床面は安定せず、柱穴や炉等もないため、竪穴住居ではないと判断した。

	建物種別	規模	間数	建物主軸	方位	備考
SB1187	総柱	3.6×3.2	3×2	東西	N16°E	
SB1188	総柱	3.0×2.1	2×2	東西	N10°E	
SB1189	側柱	7.8×5.8	4×3	東西	N10°E	中野山遺跡最大、南辺は第２次調査区
SB1190	側柱	5.5×4.0	3×2	東西	N20°E	
SB1191	側柱	5.2×3.8	3×2	東西	N34°E	南半は第３次調査区
SB1192	総柱	2.2×1.8	2×2	東西	N10°W	
SB1193	総柱	3.5×3.3	2×2	東西	N0°	
SB1194	不明	4.2×不明	2×2～	南北？	N34°E	
SB1195	側柱？	5.5×不明	4～×2～	南北	N20°E	
SB1196 (SB220)	側柱	8.4×4.2	4×2	南北	N10°E	大半が第２次調査区

表５　南区掘立柱建物一覧

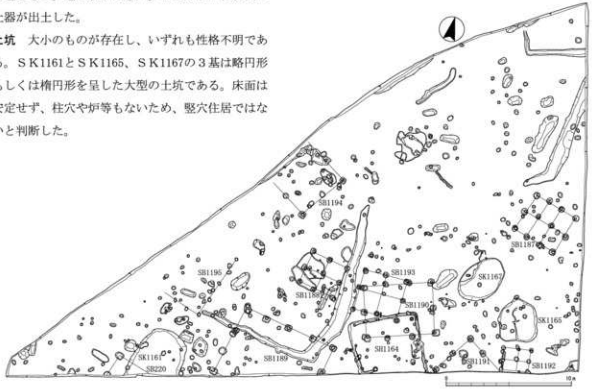


図９　南区遺構配置図（１：300）

2．北区の調査

北区は台地の北縁に位置し、東西に細長く伸びる調査区である。北側と西側は谷の落ち込みに続く。調査区内の西部にも浅い谷が北に開き、遺構はすべてその東側で確認した。面積は1,600㎡を測る。

（1）縄文時代早期の遺構

煙道付炉穴及びその可能性のある炉穴を20基確認した。大半は削平のために遺存状態が悪く、遺物もほとんど出土しなかった。ただし、ＳＦ1116（写真３）とＳＦ1135からは押型文土器の小片が出土した。また、ＳＦ1116には石皿も廃棄されていた。

ＳＦ1125（写真４・図11）は比較的残りがよく、全長1.3m、最大幅0.7mを測る。煙道の天井部も一部残存していた。底部の傾斜から煙道と焚き口もある程度復元できる。遺物は出土しなかった。

（2）縄文時代中期の遺構

竪穴住居を２棟確認した。２棟とも調査区の北壁中央部付近で検出され、半分ほどは調査区外へ広がる。いずれの竪穴住居からも、縄文時代中期後葉の土器が出土した。

ＳＨ1103（写真６）は直径3.5m程の円形と推定される。多量の礫石と土器片が出土した。周溝が２重にわたって検出され、中央部では地床炉跡も検出された。

ＳＨ1104（図13）は直径４ｍ程の円形もしくは隅丸方形と推定される。周溝が３重にわたって検出されたことから、同一地点での建替えと考えられる。

（3）縄文時代晩期の遺構

土器棺（ＳＸ1109：図15）が調査区北壁の中央付近で検出された。円形の掘形内に深鉢が斜めに置かれていたが、対となる土器または蓋となる石や土器片は認められなかった。

（4）古代の遺構

矩形の竪穴住居（ＳＨ1108：図17）１棟が調査区南壁の中央西寄りで検出された。北辺は4.3mを測るが、大半が調査区外であるために南北規模は分からない。周溝は北辺と西辺で検出された。主柱穴は２基を確認したが、竈は検出されなかった。遺物は出土しなかったが、周辺調査区の類例から古代の竪穴住居と考えられる。

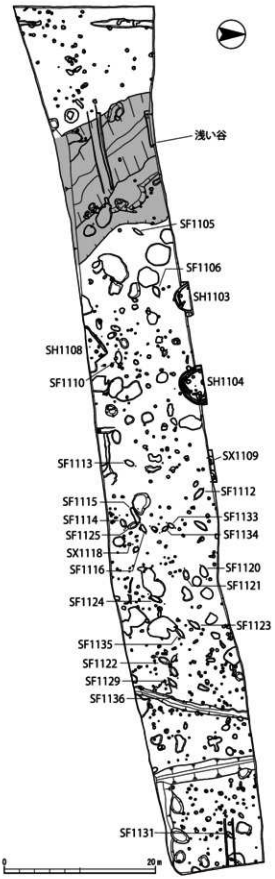


図10　北区遺構配置図（1：500）

写真3　ＳＦ1114・1115・1116・1125（東から）

写真4　ＳＦ1125（東から）

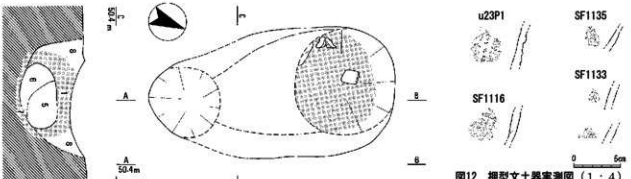
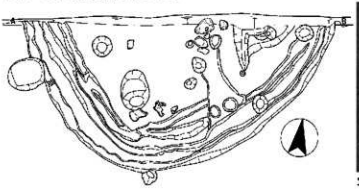


図12　押型文土器実測図（１：４）

図11　ＳＦ1125実測図（１：20）



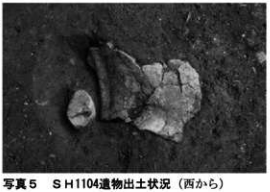


写真5　ＳＨ1104遺物出土状況（西から）

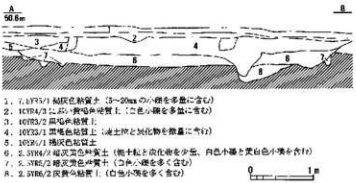


図13　ＳＨ1104実測図（１：60）

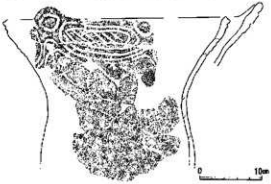


図14　ＳＨ1104出土遺物実測図（１：６）

写真６　ＳＨ1103（南から）

写真７　ＳＨ1103出土遺物

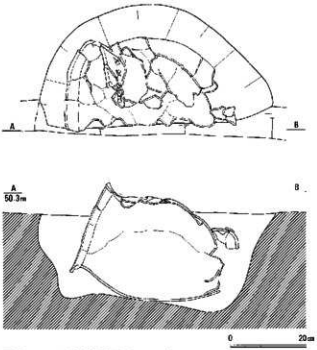


図15　ＳＸ1109実測図（１：10）

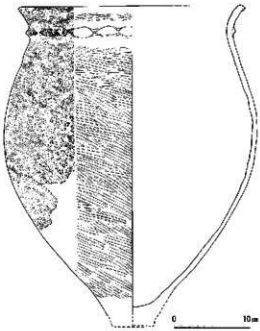


図16　ＳＸ1109出土遺物実測図（１：５）

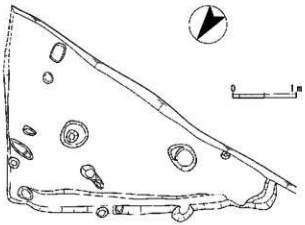


図17　ＳＨ1108実測図（１：60）

写真８　ＳＨ1108（北から）

5　北山A遺跡（第２次）

１．はじめに

北山Ａ遺跡は、中野山遺跡の東側に隣接する古代の集落跡で、遺構の内容や地形の連続性などから、両者は一連の遺跡群として捉えられる（図４）。平成22年度に行った一次調査の結果、新名神計画路線の南側に、古代の遺構が集中していることが判明した[1)]。

今回の調査は、遺跡西側の3,760㎡を対象としたもので、北山Ａ遺跡における初の本格調査である。当地の地山である黄褐色粘質土上で、縄文時代から奈良時代の遺構を検出した。これらの多くは飛鳥～奈良時代に属するものである（図18）。

２．遺構

（１）縄文時代の遺構

土器棺（ＳＸ136）　２個体分の深鉢片が対向して出土した。撹乱により上部が削平されているため詳細は不明だが、横位・合口に据えた縄文晩期の土器棺であろう（写真９）。

（２）飛鳥～奈良時代の遺構

掘立柱建物（ＳＢ110）　調査区西端で検出した梁間３間、桁行４間の側柱建物である（写真10）。主軸をN-10°-Wにとる南北棟で、柱穴は竪穴住居ＳＨ95に切られる。

竪穴住居（表６）　15棟を確認した。竪穴住居は調査地の南側に集中し、２～３棟ごとのまとまりをもつ。住居の平面形は方形もしくは長方形を呈し、その比率はほぼ同数である。主柱穴が明確でないものが大半であるが、壁柱穴を有するものはごく少なく、建物構造はなお検討の余地がある。貼床をもつものは稀で、地山をそのまま床面とする例が多い。

北山Ａ遺跡の竪穴住居は、屋内の中央や隅に浅い土坑を複数配している（写真11・12）。土坑の埋土は粘土を多く含み、上面は踏み固められる。埋土に焼土が混じるものもあるが、被熱層は形成されていない。また遺物は出土しない例が多い。貯蔵穴のほか、防湿構造や部分的な貼床などの可能性があろう。

大型土坑（ＳＫ54・60・62ほか）　竪穴住居の周辺に位置する長さ４m、幅２～３mの土坑で、深さは竪穴住居よりもやや深い。平面形は隅丸方形もしくは不整円形で、数基の土坑が複雑に重複しているものが多い。遺物の量は概して少なく、土器や鉄滓・鞴羽口などの鍛冶関連遺物がわずかに出土する程度であった。

集石土坑（ＳＫ68）　調査区南側に位置する、直径約４m、深さ約0.8mの円形土坑である。埋土の最上層には拳～人頭大の礫を集中させ、さらに円板状に破砕した須恵器甕・壺、灰釉陶器、土管、石製加工円板や砂岩製の砥石などを撒き散らしている。一方、下層には礫や遺物は殆ど含まれていなかった。土層の観察によれば、埋没の過程に特異な点は認められず、井戸枠等の下部構造の痕跡もなかった。地山の砂礫層より浸透する水を溜めた土坑であろうか。

本遺構は、出土した須恵器・灰釉陶器から、９世紀に位置付けられる。中野山遺跡・北山Ａ遺跡を通じて最も新相の古代の遺構であり、集落の終焉を考える上で重要である。また、土器の破砕を伴う遺構の例として注目されよう。

３．遺物

コンテナ38箱分の遺物が出土した。土器は中野山遺跡に比して奈良時代の土器が多い傾向がある。

遺構名	時代	平面形	法量(m)		備　　考
			長	幅	
SH1	古代		－	－	壁周溝のみ確認
SH6	飛鳥	方形	4.0	3.6	鉄製品出土
SH10	奈良	方形	4.7	4.4	
SH11	古代		4.3	－	鉄滓出土
SH19	飛鳥		－	－	
SH25	飛鳥		－	－	貼床のみ確認
SH48	奈良		4.4	－	
SH58	古代	長方形	4.7	3.2	
SH64	奈良	長方形	4.4	3.1	
SH69	古代	長方形	5.2	3.0	ＳＨ58に切られる
SH73	古代	長方形	5.4	3.9	
SH75	古代		－	－	
SH76	奈良	方形	3.8	3.8	
SH79	古代	方形	3.2	3.1	
SH84	奈良	方形	4.1	4.0	

表６　古代の竪穴住居一覧

図18　遺構平面図（1：400）

石製品は砥石が数点、鉄製品はＳＨ６内の土坑や竈内から鉄鏃等が出土した。

なお、中野山遺跡等の周辺遺跡と同様、鉄滓・鞴羽口等の鍛冶関連遺物が出土したが、鍛冶炉や工房を確認することはできなかった。

４．まとめ

今回の調査では、竪穴住居を中心とする古代の遺構を確認した。遺構は調査地の南側に偏在しており、さらに南側に竪穴住居群が広がっている可能性が高い。また、隣接する中野山遺跡に比べ、掘立柱建物が少ないことが特筆される。遺物は奈良時代のものが一定量みられ、中野山遺跡とは集落の時期が若干異なっている可能性がある。今後の調査によって、集落の時期的な変遷や居住形態の差などを明らかにしていきたい。

註

1）北山Ａ遺跡一次調査の詳細については、Ｐ26を参照されたい。

写真９　ＳＸ136（東から）

写真10　ＳＢ110（東から）

写真11　ＳＨ６（西から）

写真12　ＳＨ73（西から）

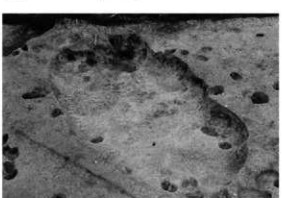


写真13　ＳＫ86（北から）

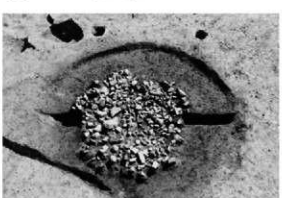


写真14　ＳＫ68（西から）

6　筆ヶ崎古墳群（第２次・一次）

１．はじめに

筆ヶ崎古墳群は、四日市市小牧町字筆ヶ先に所在する[1]。古墳群の存在は以前から知られており、８基の古墳が確認されていた[3]。古墳が築造されている場所は南向きの緩やかな丘陵斜面で、南側には西方向から谷が深く入り込み、小河川が流れている。この谷を挟んで南側の丘陵上には、居林古墳群や、飛鳥時代～奈良時代の集落である中野山遺跡が存在している。

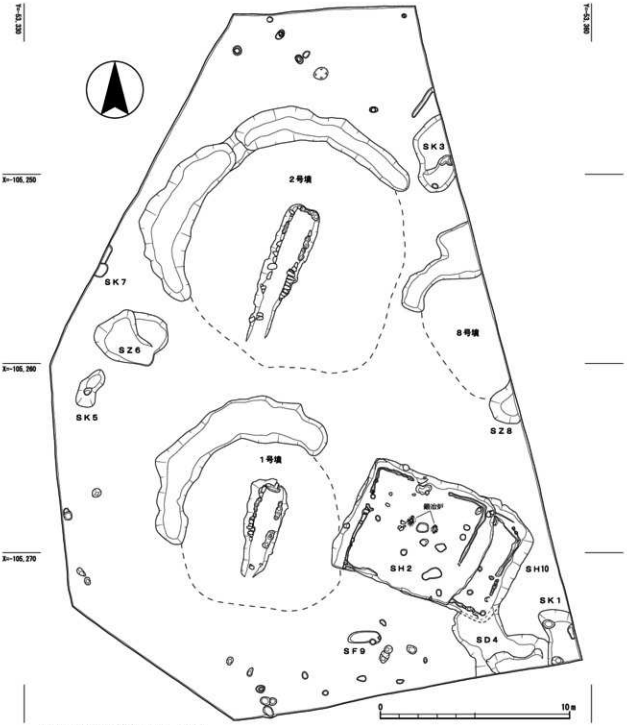


図19　調査区全体図（１：200）

近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴い、本古墳群の存在する場所にも四日市北JCTが建設されることとなったため、平成22年度に古墳の位置や現況の確認を行った。その結果、先に知られていた８基に加えて、新たに２基の古墳と思われる地形の隆起が確認され、計10基の古墳が存在する可能性が高いことが判明した。これら10基の古墳は、３・４基の古墳からなる３つの小群を形成している。古墳の確認とともに、次年度以降の発掘調査に備えて、１・２・８号墳の３基の古墳で構成される小群の地形測量を行った。

平成23年度には、前年度に地形測量を行った１・２号墳を中心に、750㎡の範囲について第２次調査を実施した。８号墳については墳丘のほとんどが事業地外に存在しているため、ごく一部のみの調査となった。調査期間は平成23年９月20日～平成24年１月24日である。また、それと併行して、古墳群周辺の遺構の有無の確認を目的とした一次調査も行っている。

２．古墳

（１）１号墳

１号墳は１・２・８号墳のなかでは、最も斜面の下方に築造されている古墳である。上部をかなり削平されていたが、周溝や横穴式石室が検出された。それらからみると、直径８ｍほどの円墳であると考えられる。

周溝　周溝は浅く、やや不整形である。斜面上方にあたる北側から西側にかけてのみに設けられており、墳丘の東側から南側にかけては周溝が掘られていなかったようである。

周溝内には石室石材と思われる礫が集積された箇所もみられたため、周溝が完全に埋没していない段階で石室が破壊され、周溝内に石室石材が集積されたものと考えられる。

横穴式石室　１号墳の横穴式石室はほぼ破壊されており、右袖部の一部と玄室右側壁のごく一部が残存していたに過ぎない。しかしながら、床面に残されていた石材の抜き取り痕ともあわせて、疑似両袖式の横穴式石室で、玄室は胴張りをもつことが明らかとなった。石室は遺存状況が悪いため規模については不明な点もあるが、羨道長は0.8ｍ以上、玄室長は2.1ｍ、玄室最大幅は1.1ｍほどとみられる[3]。

壁体には長径30㎝ほどの川原石が多く用いられている。袖石は立柱状を呈していない。基底石のみに他よりも大型の石材を用い、その上に小型の石材を積んで袖部を形成しているようである。

羨道は途中から素掘りの墓道となる。墓道からは長径30㎝ほどの礫が検出された。その礫付近では閉塞土と思われる土層が確認できたことから、閉塞は主に土で行われ、その中にこうした礫が入れられていたものと思われる。

なお、石室の下部は、旧表土上面から深さ0.6ｍほどの墓壙を掘り込み、その中に構築されていることが確認された。旧表土より上では石室壁体の構築と墳丘の盛土とが併行して行われていたようである。

出土遺物　横穴式石室の羨門付近の埋土中から、金環が２点出土した。いずれも床面からはかなり浮いており、石室から石を抜き取った後に埋め戻したと思われる土の中から検出されている[4]。２点とも銅芯に金箔を張って作られたもので、大きさもほぼ同じである。うち１点の外径は2.3㎝ほどあり、断面は長径0.65㎝、短径0.45㎝の楕円形を呈する。

また、玄室の奥壁付近では、床面に土師器片が散布している状況が確認された。１個体分の小型の土師器甕である可能性が高い。ほぼ床面直上で検出されたことや、形態からみて古墳時代のものと思われることから、玄室内に副葬されていた土器であると思われる。

周溝内からも須恵器坏身や土師器甕などが出土したが、いずれも小片で、確実に古墳に伴う須恵器は抽出しがたい。一方、墓道の閉塞部付近では、石室破壊時の攪乱土と思われる土層中からほぼ完形の須恵器無蓋高坏が検出されている。これが１号墳に伴うものとすれば、この古墳は７世紀前葉～中葉に築造されたものと考えられる[5]。

（２）２号墳

２号墳は１号墳にくらべてやや大きく、１・２・８号墳のなかでは、最も斜面の上方に築造されている古墳である。上部をかなり削平されていたが、周溝や横穴式石室が検出された。それらからみると、東西径が11ｍ、南北径が12ｍほどの円墳であると思われる。

写真15　２号墳周溝内土器出土状況

周溝　周溝はかなり明瞭に検出できた。深さは最も深いところで40cmほどである。斜面上方に当たる墳丘の北側から西側を中心に設けられており、斜面下方に当たる東側から南側にかけては周溝が掘られていなかった。

周溝内からは、中層から上層を中心に、多数の須恵器や土師器の破片が出土した（写真15）。また、周溝内の土器群に混じって石室石材と思われる礫が多数検出された。このことから、周溝が完全に埋没していない段階で石室が破壊されたものと考えられ、周溝内の土器群は石室が破壊を受けた前後に周溝内に投棄されたものと推測される。古墳時代後期～終末期のものと思われる須恵器も出土しており、その中には、元々は石室内にあった須恵器も含まれている可能性が高い。

横穴式石室　２号墳の横穴式石室も大きく破壊を受けていたが、羨道左側壁の下部などは良好に遺存していた。他の部分についても、基底石のみが部分的に遺存しており、床面に残されていた石材の抜き取り痕ともあわせて、ほぼ石室の形態を知ることができた。石室は疑似両袖式で、玄室は明瞭な胴張りをもつ。羨道長は1.7m、玄室長は3.1mで、玄室最大幅は1.1mほどである。

石室壁体を構築している石材は、長径40～50cmほどの川原石の円礫が主体である。長細い形状の円礫を、長軸が石室主軸に直交するように小口積みにしている。ただし、最下段のみは玄室・羨道ともにやや大振りの石材を、長軸が石室主軸と並行するように置いている。また、奥壁については最下段右隅の１石のみしか遺存していなかったが、長細い石材を縦長になるように置いており、側壁とは石材の積み方がやや異なっていた可能性がある。

羨道の前面には１号墳と同様に素掘りの墓道があり、やはり閉塞に用いたと思われる礫が検出された。この礫の付近では閉塞土と思われる土層が確認できたが、その土層中から土師器片が数片出土している。

墓壙についても、１号墳と同じく旧表土上面から0.5mほどの深さに掘り込まれており、石室下部はその中に構築されていた。旧表土より上についても、やはり石室壁体の構築と墳丘の盛土とが併行して行われていたようである。

出土遺物　横穴式石室の奥壁付近の床面より、須恵器の長頸壺と無蓋高坏が１点ずつ、完形で出土した。無蓋高坏は倒立した状態で出土している。長頸壺は高台状の脚を持ち、脚には小さな方形の透孔を二方向にあけている。無蓋高坏は脚部に二段二方向の透孔をもつ。この２点の須恵器からみて、２号墳は７世紀前葉～中葉に築造されたものと考えられる。

また、玄室内の埋土中から一辺2.5cm、厚さ0.3～0.4cmほどの板状の鉄片が出土した。床面からかなり浮いた位置で出土している。どのような製品の破片なのか特定できておらず、副葬品の一部であるかどうかは不明である。

周溝内から出土した土器には、須恵器坏身・短頸壺・高坏や土師器壺などがある。須恵器高坏には脚に二段三方向の透孔をもつものがあり、これは遺存状況や帰属時期などからみて古墳に伴うものである可能性が高い。また、短頸壺にも古墳に伴うと考えられるものがある。

（３）８号墳

８号墳は２号墳の東側に位置する。事業地内には西裾部のみが入っており、発掘調査もこの部分が対象となった。

調査範囲が狭いため、周溝と墳丘の一部を検出したにとどまる。調査区内では埋葬施設に関する情報は得ることができなかった。

周溝　墳丘の北側から西側にかけての部分で周溝が検出された。浅く、不整形である。周溝内から奈良時代のものと考えられる土器が出土しているほか、底面付近で焼土の広がりも認められたため、後世の改変を受けている可能性もある。

周溝内の墳丘裾部からは、古墳時代のものと考えられる須恵器坏蓋と土師器甕が出土した。周溝底からはやや浮いている。

出土遺物　周溝内から出土した須恵器坏蓋は口縁部と天井部との境に明瞭な稜をもつが、口径はそれほど大きくない。土師器の甕は、口縁部の破片である。大型のものと思われ、頸部の締まりは緩い。

これらが８号墳に伴う遺物であれば、８号墳は１・２号墳と同じく７世紀前葉～中葉に築造されたとみられる。

３．古代の遺構

今回の筆ヶ崎古墳群第２次調査において、奈良時代の遺構が複数検出された。当初はこうした古墳時代以降の遺構の存在は想定していなかったが、竪穴住居のなかには工房的な機能を持つとみられるものもあり、重要な成果となった。

（１）竪穴住居

まず、竪穴住居について述べておきたい。竪穴住居は２棟検出されている[6]。

ＳＨ２　大型の竪穴住居で、平面形は東西7.2m、南北６ｍの長方形を呈している。ただし、壁周溝の位置からみて、内部の空間は5.2m四方のほぼ正方形を呈していたと考えられる。緩やかな斜面を深く掘り込んで造られており、深い部分では0.7mほどもある（巻頭図版２）。床面からは鍛冶炉が２基検出されており、工房施設的な機能を有していた可能性がある。

ＳＨ２は、先行して存在したほぼ同じ規模の竪穴住居ＳＨ10を人為的に埋めた後に、その上からやや西へ位置をずらして掘り込んで造られている。床面はＳＨ10の床面よりも20～25cmほど高い。なお、ＳＨ10と重複しておりＳＨ10の埋土が床となっている部分では、床面に粗い砂質土を５cmほど貼って固めていた。鍛冶を行うにあたって防湿を意図していた可能性がある。

四周の床面からは壁周溝が検出された。東西の壁周溝は、掘形の壁から若干離れた位置で検出されている。この部分では壁際に礫を多く含む土が堆積していた。壁周溝に板状のものが立てられており、それと壁との間にこうした土が詰められていたとも考えられる。もしそうであれば、やはり防湿を意図していた可能性があろう。

北辺中央の壁際では焼土塊や炭化物の集中がみられた。土師器甕の破片もまとまって出土しており、竈が存在していたものと考えられる。

鍛冶炉は２基とも同じ形態である[7]。炉床は粘土を貼って構築されていると思われ、長径40～50cm、短径25～30cm、深さ10cmほどの楕円形に窪んでいる。内面は黒色を呈し、非常に硬く硬化している。北端は片口状にやや突出し、被熱が弱まっていることから、その部分に羽口が設置されていたと推測される。西側の鍛冶炉では、内部に椀形の鉄滓が残されていた（裏表紙写真）。東側の鍛冶炉の埋土からも小型の鉄滓が検出されている。

また、２基の鍛冶炉の間からは、径45cm、深さ15cmほどの小型の土坑が検出された。埋土上層には炭化物を多く含んでいた。埋土を篩にかけたところ、微細な鉄滓や鍛造剥片が多量に検出された。中には粒状滓とみられるものも含まれている。この土坑は鍛冶作業に関わる施設であった可能性もあろう。

ＳＨ２の埋土からは多量の土器が出土した。須恵器坏・坏蓋・長頸壺・甕、土師器坏・甕などがある。床面直上には、ほぼ完形の須恵器坏が２点残されていた（図20　１・２）。この坏は無高台の坏で、底部はヘラ切り無調整である。こうした出土遺物からみて、ＳＨ２は奈良時代前半のものと考えられる。

埋土には多量の炭化物や焼土塊も混じっていた。ただし、大きな鉄滓は出土していない。床面付近の埋土については篩にかけた上で肉眼観察を行い、さらに磁石を用いて精査したが、５mmを越えるような大きさの鉄片はほとんど検出されなかった。こうし

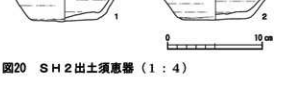


図20　ＳＨ２出土須恵器（１：４）

た点と、鍛冶炉の形態や土坑から出土した鍛造剥片などからみて、ＳＨ２では小型の鉄製品を製作するような鍛錬鍛冶が行われていた可能性が高い[8]。

ＳＨ10　ＳＨ２と重複する竪穴住居で、2/3程度がＳＨ２によって壊されている。ただし、ＳＨ２の方が床面が高いため、この住居の床面は完存していた。平面形は東西７m、南北6.1mの長方形を呈している。造られた位置や規模はＳＨ２とほぼ同じであるが、内部に鍛冶炉は構築されていなかった。

四周の床面からは壁周溝が検出された。また、北東隅部付近で竈が検出された。竈付近からは土師器甕の破片がまとまって出土している。

埋土からは多量の土器が出土した。須恵器坏・坏蓋・長頸壺、土師器甕のほか、径３cmほどの鉄滓が出土している。また、南側の壁周溝上面からは長さ25cmの大型の釘と思われる鉄製品が出土している。出土した須恵器からみて、ＳＨ10は奈良時代前半のものと考えられる。ＳＨ２とは時期的にも近い可能性が高い。屋内から鍛冶炉は発見されなかったものの、鉄滓や鉄製品の出土からみて、付近で鍛冶が行われていた可能性もあろう。

（２）その他の遺構

竪穴住居以外には、土坑や溝、落ち込み、ピットなどが検出されている。主なものについて概要を述べておきたい。

ＳＫ１　調査区南東隅で検出された不整形な土坑である。床面でピットが複数検出された。ピットはいずれも深さ30cmほどある。柱痕は確認できなかった。

埋土中からは、須恵器坏蓋・長頸壺、土師器甕、管状土錘などが出土した。これらの遺物からみて、ＳＫ１は奈良時代のものと考えられる。

ＳＫ３　浅い不整形な土坑である。東側は調査区外へのびており、全形を窺うことはできない。

埋土中からは、須恵器坏・坏蓋・長頸壺・甕、土師器甕などが出土した。このうち、須恵器坏と坏蓋にはほぼ完形に復元できるものもある。須恵器坏は輪高台をもつ。須恵器坏蓋は扁平な摘みをもち、口縁端部で短く屈曲する。これらの須恵器からみて、ＳＫ３は奈良時代のものと考えられる。

ＳＦ９　長軸1.7m、短軸0.5mほどの浅い楕円形の土坑である。最上層には焼土塊を多く含む土が堆積していた。埋土の中位には、白色のシルトからなる厚さ１cmほどの薄い土層が部分的に広がっていた。そして、この土層の下には、被熱したと思われる土層がみられた。

この遺構の性格は不明であるが、最上層を中心に土師器甕の破片が出土しており、それらの土器からみて奈良時代の遺構である可能性が高い。

４．一次調査

一次調査は、幅２mのトレンチを設定して行った（図21）。調査面積は560㎡（総延長280m）である。当初は、墳丘が完全に削平された古墳や小石室等の有無を確認することを主眼としていたが、第２次調査区内で奈良時代の遺構が多数検出されたため、奈良時代の遺構が検出されることも念頭に置いて調査を行った。

その結果、すべてのトレンチで遺構・遺物が検出され、古墳群の周辺に広く遺構・遺物が分布するこ

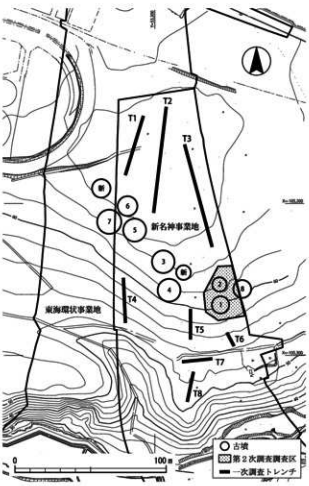


図21　筆ヶ崎古墳群トレンチ配置図（１：2,500）

とが判明した。遺構は、古墳群の南側の緩斜面において最も濃密に分布していた。古墳群の北側については、北へいくほど遺構密度が低くなっていく様子が窺われた。

検出された遺構には、土坑や溝、ピットなどがある。Ｔ５では、南北方向にのびる溝状の遺構が検出された。また、Ｔ６では埋土に須恵器や土師器を多量に含む大型の土坑が検出された。第２次調査区で検出されたＳＨ２やＳＨ10のような遺構が存在する可能性もある。

これらの遺構やその周辺から出土した遺物には、須恵器や土師器、管状土錘などがある。須恵器には飛鳥時代から奈良時代にかけてのものがみられるが、なかでも奈良時代に属するものが多いようである。したがって、検出された遺構の多くは奈良時代のものである可能性が高い。

５．まとめ

筆ヶ崎古墳群第２次調査では、これまで内容が不明であった筆ヶ崎古墳群の内容について、様々な情報が得られた。横穴式石室を埋葬施設とすることが確実となったほか、横穴式石室が周辺の古墳と同じく川原石を用いて構築されていることや、疑似両袖式で玄室が胴張りをもつことなどが確認できた。築造時期についても、７世紀前葉～中葉を中心とすることが判明した。

また、墳丘や石室の構築過程についてもいくつかの知見が得られた。こうした古墳の構築に関わる成果は、今後の筆ヶ崎古墳群の発掘調査においても貴重な情報といえるだろう。

そして、もうひとつ重要な成果は、奈良時代の遺構群の検出である。これまで全く知られていなかったものであり、当該地域における古代集落の展開について再考を促すこととなった。

特に、ＳＨ２のような鉄製品の加工を行う施設が確認されたことは注目に値する。筆ヶ崎古墳群の周辺では、遺跡の発掘調査で鉄滓が多く出土していることや、筆ヶ崎古墳群東方の西大鐘町付近が『和名類聚抄』にみえる大金郷の所在地と推定されることから、古代において鍛冶が盛んに行われていた可能性が指摘されていたが[9)]、発掘調査で確実な鍛冶遺構を発見できたことは大きな意味を持つ。筆ヶ崎古墳群近辺の調査が進めば、さらに鍛冶に関わる痕跡を発見できる可能性もあるだろう。今後のＳＨ２の資料の整理・分析ともあわせて、当該地域における生産活動の具体像を明らかにしていく手がかりが得られることを期待したい。

註

1）字名は「筆ヶ先」であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地としては従来より「筆ヶ崎古墳群」となっていたため、調査においてもそれを踏襲した。

2）四日市市1988『四日市市史』第２巻資料編考古１

3）計測値は内法である。後道長には袖石部分も含まれている。

4）出土状況からみて、石室破壊時に意図的に埋め戻された可能性もあろう。

5）須恵器の編年や暦年代観については、主に以下の文献を参照した。

尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅―猿投窯・湖西窯編年の再構築』第５分冊　東海土器研究会、城ヶ谷和広2010「編年及び編年表　土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史』資料編４考古４　愛知県

6）ＳＨ２は、調査時にはＳＺ２という遺構名を付与していた。遺物注記もＳＺ２でなされているが、竪穴住居状の遺構であるため、本概報では名称をＳＨ２に変更した。

7）２基の鍛冶炉が同時に使用されていたかどうかは不明である。建物内に計画的に配されたような様相が認められることと、両者とも炉床の遺存状況がよいことからみて、同時に使用されていた可能性が高いと思われるが、さらに検討が必要であろう。

8）安間拓巳1995「古代の鍛冶炉―その形態および鍛冶工程との関連について―」『考古学研究』42-2　考古学研究会。なお、金床石の存在についても調査中に留意していたが、確実なものは発見できなかった。

9）四日市市遺跡調査会1988『北山Ｃ遺跡』

7　北山C遺跡（一次）

1．はじめに

当遺跡は、四日市市北部を東西に流れる朝明川の中流域北岸、標高約60mの台地上にある広大な遺跡で、四日市市西大鐘町と北山町、一部は桑名市志知と東員町中上にまで及ぶ。

この遺跡は、四日市市によってこれまでに２回の調査が行われた。

1975年の調査では、古墳時代後期の掘立柱建物や竪穴住居を検出し、日常生活用具としての須恵器や土師器が出土した。1987年の調査では、弥生時代の遺構や、古墳時代の集落跡の存在を示す遺構や遺物を確認した。弥生時代後期と古墳時代後期との複合遺跡である[1)]。事業地は、本遺跡の最も北に位置する桑名市志知地内であり、現況は森林である。

2．調査の概要と結果

幅２mのトレンチを７本設け、600㎡を調査した。その結果、トレンチ１・４・５・６で幅１mほどの溝や土坑などを検出した。

地表から遺構上面までの深さは、15cm～30cmであった。

これらの溝のうち３つは、L字形に曲がっていた。埋土から、須恵器と土師器が出土した。溝の大きや形状から推定すると、この遺構は古墳または方形周溝墓の周溝の可能性がある。

以上の結果、L字状の溝を確認した西側部分と、東側部分の2箇所を二次調査の対象とした。

註

1）四日市市1993『四日市市史』第3巻資料編考古Ⅱ

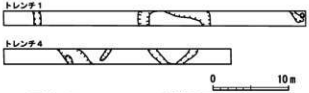


図22　トレンチ１・４の遺構平面略図（１：500）

写真16　トレンチ４（北から）

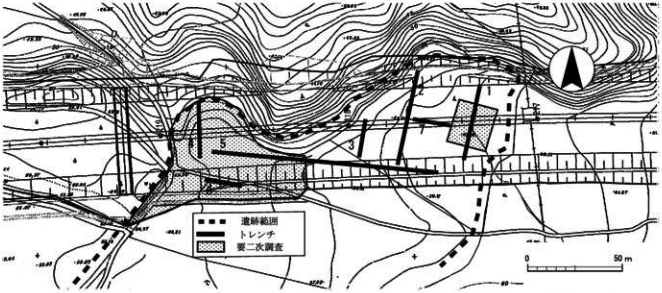


図23　トレンチ配置図（１：2,000）

8　黒土遺跡（一次）

1．はじめに

黒土遺跡は、四日市市北山町に所在し、員弁川と朝明川に挟まれた台地上に位置する。周辺には北山A遺跡、野中遺跡などがある。

2．調査の概要と結果

（1）平成22年度の調査

7箇所のトレンチ（580㎡）を設けて一次調査を行った。その結果、トレンチ4・トレンチ5でピットや溝などと思われるものがごく少数検出された。掘削中に近世～近代の陶磁器片が少量出土していることから、これらの遺構は近世以降のものであるか、あるいは木の根や動物の巣穴の痕跡である可能性が考えられる。その他のトレンチからは、遺構・遺物は検出されなかった。

（2）平成23年度の調査

6箇所のトレンチ（380㎡）を設けて調査を行った。これらについても、近世以降のものか、木の根などの痕跡である可能性が高い。調査地西側では、大規模な地形改変の跡が認められ、遺構を確認することはできなかった。

（3）まとめ

以上の結果から、当遺跡の高速道路建設予定範囲については、二次調査の対象外とした。

写真17　平成23年度トレンチ5（西から）

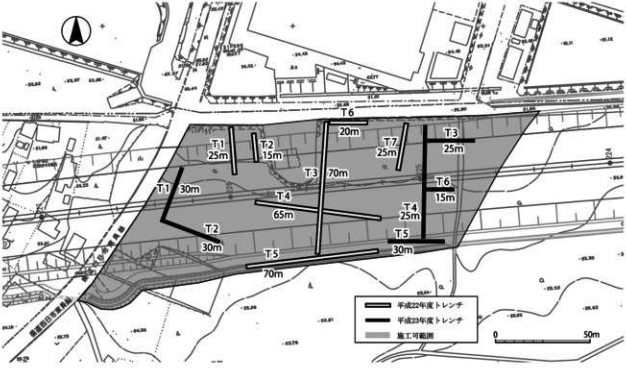


図24　トレンチ配置図（1：2,000）

9 北山A遺跡（一次）

1．はじめに

北山A遺跡は、朝明川中流北岸の台地に位置する遺跡である。一次調査は平成22・23年度にわたって行った。現況が山林・畑地であった遺跡の西部は22年度に行い、県道を挟んで、現況が住宅地跡であった遺跡の東部は23年度に行った。

2．調査の概要と結果

調査は調査範囲内に幅2mのトレンチを22年度は12箇所（面積 950㎡）、23年度は10箇所（面積 500㎡）設けて行った（図25）。

22年度の調査区では、遺構検出面は黄褐色粘質土を主体とする基盤層で、遺構検出面までの掘削深度は20～60cmと場所によってばらつきがあった。調査の結果、全てのトレンチで竪穴住居・溝・土坑・ピットなどの遺構を確認した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石製品（磨石・台石）が出土したが、全体としては、飛鳥・奈良時代のものが多かった。

遺構・遺物は、調査区北側では比較的少なく、南側で多く確認した。また、トレンチの掘削深度は北東部から北部・北西部にかけて徐々に深くなっている。

個々のトレンチを詳細にみると、トレンチ５・８・11で遺構・遺物が集中し、トレンチ８からは完形品に近い須恵器椀、トレンチ11からは須恵器高杯の脚部が出土した。

遺跡東部の23年度の調査区は、遺跡西部の22年度の調査区より地形が低くなり落ち込んでいることもあり、調査の結果、検出面からは遺構・遺物は確認できなかった（表７）。

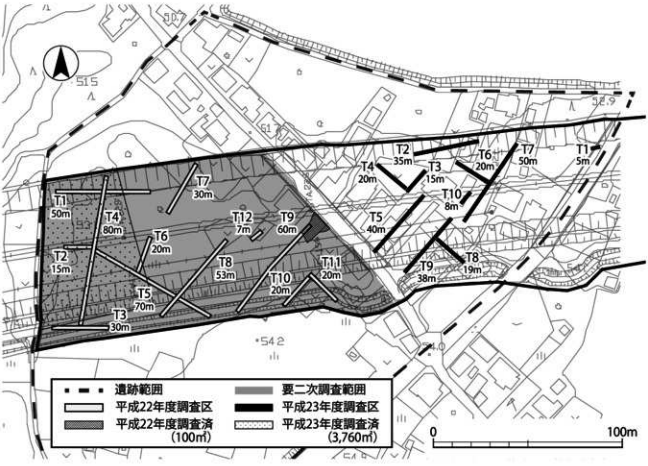


図25　トレンチ配置図（1：2,000）

平成22年度

トレンチNo.	調査面積 m×m(㎡)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物
T1	2×50(100)	40～60	溝・土坑・ピット	－
T2	2×15(30)	40～60	竪穴住居・土坑・ピット	土師器
T3	2×30(60)	40～60	溝・土坑・ピット	土師器
T4	2×80(160)	40～60	竪穴住居・溝・土坑・ピット	土師器 須恵器
T5	2×70(140)	40～60	竪穴住居・溝・土坑・ピット	土師器 須恵器
T6	2×20(40)	30～40	竪穴住居・土坑・ピット	土師器
T7	2×30(60)	50	竪穴住居・土坑・ピット	土師器
T8	2×53(106)	40～50	竪穴住居・溝・土坑・ピット	土師器 須恵器
T9	2×60(120)	40～50	竪穴住居・溝・土坑・ピット	土師器
T10	2×20(40)	20	竪穴住居・溝・土坑・ピット	－
T11	2×20(40)	20	竪穴住居・溝・土坑・ピット	土師器
T12	2×7(14)	40	ピット	－

写真18　平成22年度トレンチ２

平成23年度

トレンチNo.	調査面積 m×m(㎡)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物
T1	2×5(10)	130	－	－
T2	2×35(70)	40	－	－
T3	2×15(30)	20～30	－	－
T4	2×20(40)	30	－	－
T5	2×40(80)	60～110	－	－
T6	2×20(40)	30	－	－
T7	2×50(100)	30	－	－
T8	2×19(38)	20～70	－	－
T9	2×38(76)	60	－	－
T10	2×8(16)	40	－	－

表７　一次調査結果一覧

写真19　平成22年度トレンチ10

10　中野山遺跡（一次）

1．はじめに

中野山遺跡は、四日市市北山町に所在し、朝明川中流北岸の台地上に位置する。以前から古墳時代を中心とする遺跡として知られてきたが、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）から東海環状自動車道が分岐する四日市北JCT建設部分にかかるため、平成22年度から平成23年度にかけて一次調査を実施した。

2　調査の結果と概要

（1）平成22年度の調査

台地上の平坦面及び谷の傾斜地に18箇所のトレンチ（計1,530㎡）を設けて調査を行った（図26）。

遺構はすべてのトレンチで検出し、竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・ピット等を確認した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石製品各種が出土し、破片が主体ながら完形品に近い個体も認められる。帰属時期は飛鳥～奈良時代（７～８世紀）のものが大勢を占める。

（2）平成23年度の調査

平成22年度に調査した区域の南西で北山城跡に隣接した台地上の平坦面に９箇所のトレンチ（800㎡）、北側の谷の底部に３箇所のトレンチ（80㎡）をそれぞれ設けて調査を行った（図26）。

台地上の平坦面からは、竪穴建物・溝・ピット等の遺構を確認した。遺物は、土師器・須恵器などが出土した。これら遺物の帰属時期は飛鳥～奈良時代（７～８世紀）のものが大半であった。

谷の底部からは、小支谷や落ち込みなどが確認され、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗・剥片・木製品などが出土した。

（3）まとめ

上記の調査結果から、遺構・遺物が確認されなかった谷の傾斜地を除いた範囲で二次調査が必要と判断した（図26）。

写真20　平成22年度トレンチ16（北から）

写真21　平成23年度トレンチ９（北から）

写真22　平成23年度トレンチ12（北から）

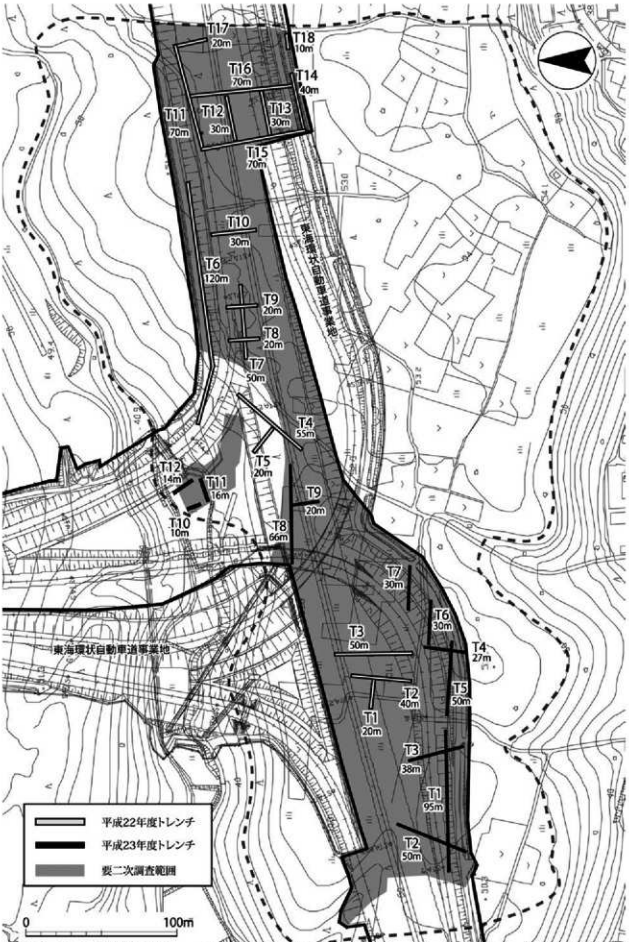


図26　中野山遺跡（一次）トレンチ配置図（1：2,500）

11　北山城跡（一次）

1．はじめに

北山城跡は、朝明川中流北岸の台地に位置する戦国時代の城館跡である。この城は戦国時代に八風道沿いに築かれた中世城館の一つと考えられる。

一次調査は城の土塁の外側で行った。

2．調査の概要と結果

調査は幅２ｍのトレンチを台地平坦部に３箇所、斜面に４箇所、斜面中腹にある中段に１箇所、平地に３箇所の合計11箇所（面積 630㎡）設けて行った（図27）。

遺構は、台地では竪穴住居・溝・焼土・ピット、斜面ではピット、中段では土坑、平地では溝・ピットを確認した。遺物は土師器・須恵器が出土した。これらの遺構や遺物は古墳・飛鳥・奈良時代のものと考えられる。

個々のトレンチを詳細にみると、台地に設けたトレンチ４・５・６の検出面は褐色粘質土を主体とする基盤層で掘削深度は30～40㎝であった。斜面に設

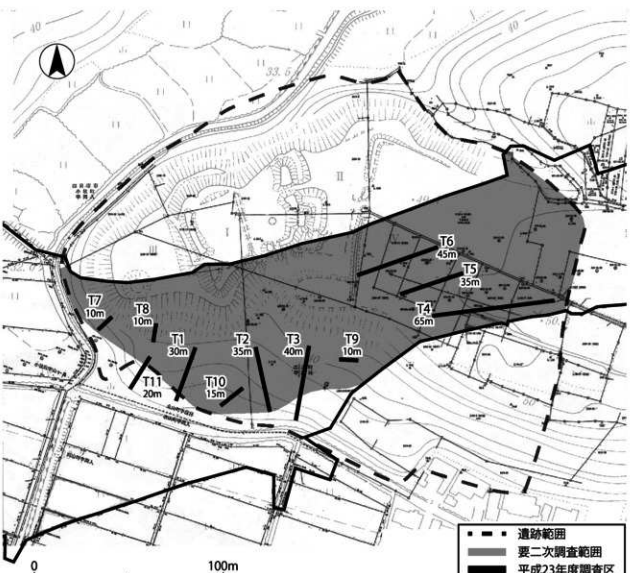


図27　トレンチ配置図（１：2,000）※伊藤徳也2008『再発見・北伊勢の城』所収の現況図を合成した。

けたトレンチ２・３・７・８の検出面も褐色粘質土を主体とする基盤層で、掘削深度は平均して約50cmであった。台地と斜面の土層は表土・黒褐色粘質土または暗褐色粘質土・褐色粘質土（基盤層）の順序で堆積している。中段に設けたトレンチ９の検出面は褐灰色粘質土を主体とする基盤層で掘削深度は10cmと浅い。平地に設けたトレンチ１・10・11の検出面の北側は褐色粘質土を主体とする基盤層で、掘削深度は約30cm、南側は暗緑灰色粘質土を主体とする基盤層で、掘削深度は最深160cmであった。つまり、平地の北側より南側の方が検出面までの掘削深度が深くなっている。この遺跡の土層の特徴はトレンチ９を除き全体的に黒色粘質土が中間層に見られ、トレンチ３の南端を除き粘質土で層が形成されている（表８）。

北山城跡の東側に隣接する中野山遺跡では飛鳥・奈良時代の集落の存在を確認しており、その集落が当台地部まで広がっていた可能性がある。

トレンチ№	調査面積 m×m(㎡)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物
T1	2×30(60)	50～160	溝 ピット	土師器 須恵器
T2	2×35(70)	35～55	ピット	土師器 須恵器
T3	2×40(80)	60～90	—	—
T4	2×65(130)	30	ピット	土師器
T5	2×35(70)	40	竪穴住居 ピット	土師器
T6	2×45(90)	40	竪穴住居	土師器
T7	2×10(20)	30～46	—	—
T8	2×10(20)	30～90	ピット	—
T9	2×10(20)	10	土坑	—
T10	2×15(30)	30	ピット	—
T11	2×20(40)	80～150	—	—

表８　一次調査結果一覧

写真23　トレンチ６（土師器）

写真24　トレンチ９（土坑）

写真25　トレンチ８全景（南から）

写真26　北山城跡全景（南から）

12　小牧南遺跡（一次）

1．はじめに

小牧南遺跡は、平成５年に実施した第二名神高速道路（現在の新名神高速道路）建設に伴う分布調査で新たに発見した遺跡で、四日市市小牧町の朝明川南側の台地斜面（標高35～37m）に立地する。

2．調査の概要と結果

本年度は、先行工事が予定されている高速道路路線の橋脚部分（3,800㎡）を対象に調査を行った。調査は幅２mのトレンチを６箇所（Ｔ１～Ｔ６）設定して実施した（図28）。

遺構検出面は暗褐色粘質土を主体とする地山で、遺構検出面までの掘削深度は0.3～0.5mである。調査の結果、全てのトレンチから遺構・遺物を濃密に検出した。

遺構としては、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物の柱穴と思われるピットや土坑、溝がある。なかでも、Ｔ４中央辺りでは複数の切り合いからなる竪穴住居群を確認している。

出土遺物は、古墳時代の土師器が大半を占め、僅かではあるが縄文土器もみられた。

以上の調査結果から、対象範囲には古墳時代でも前期を中心とする集落跡と縄文時代の集落跡の存在が予想され、二次調査が必要と判断した。

写真27　トレンチ６（南から）

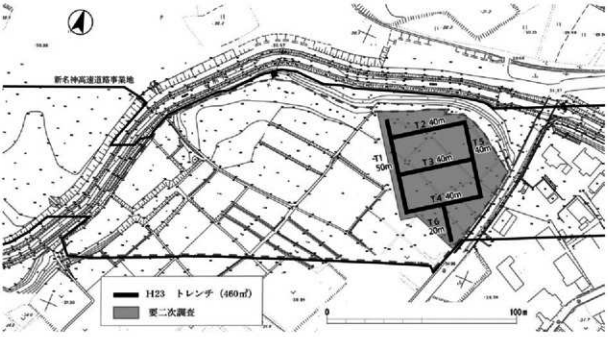


図28　トレンチ配置図（1：2,000）

13　釜垣内遺跡（一次）

1．はじめに

当遺跡は、鈴鹿市小岐須町、入道ヶ岳と野登山との谷間を流れる御幣川と、入道ヶ岳より発する鍋川に挟まれた扇状地上にあり、山茶碗や陶器類などが採集されたことから、鎌倉時代以降の遺跡として知られていた。平成19年の分布調査で遺跡外でも広く遺物の散布を確認したため、遺跡範囲を拡大した[1]。

遺跡の北西には、上分田遺跡や寺垣内遺跡などの中世の遺物散布地が存在し[2]、さらに西方には、戦国時代の築城と伝えられる小岐須城跡がある[3]。

事業地は、遺跡の北端及び南端部分を除く大部分を占める。調査地の現況は田畑である。

2．調査の概要と結果

調査は、幅２mのトレンチを41箇所設けて行った。調査面積は、2,300㎡である。

その結果、19箇所のトレンチで溝や土坑、柱列などの遺構を検出した。表土から遺構面までの深さは、トレンチ12・17・36など調査地中央部で約30㎝～40㎝であり、トレンチ４・５・38・39などの西部で約80㎝～100㎝であった。

遺構は、調査地の西部を中心に分布しており、トレンチ15・23以東では遺構は認められなかった。なお、調査地中央部のトレンチ９・10・11で南北に走る旧河道を検出した。

遺構の埋土中には、13世紀代の土師器や山茶碗・常滑焼などの陶器が認められた。また、トレンチ10などから灰釉陶器も若干量出土しており、釜垣内遺跡は平安末から鎌倉時代の集落であると考えられる。

以上の結果、調査地の西半を二次調査の対象とした。なお、耕作物や家屋があるため一次調査未実施地があり、一次調査が必要である。

註

1）三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター2007『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）四日市JCT～菰野IC建設予定地内埋蔵文化財一覧』Ⅲ

2）鈴鹿市教育委員会1987『鈴鹿市遺跡地図』鈴鹿市埋蔵文化財調査報告Ⅲ

3）仲見秀雄1983「鈴鹿市」『三重県の地名日本歴史地名大系24』平凡社

写真28　トレンチ７（南から）

写真29　トレンチ17（東から）

写真30　トレンチ13（西から）

調査杭No.	遺構	遺物
1	なし	なし
2	溝	なし
3	なし	なし
4	溝	なし
5	土坑・溝	なし
6	土坑・ピット	土師器・山茶碗
7	溝	土師器
8	土坑・溝・ピット	土師器・土器
9	土坑・溝・ピット	土師器
10	なし	灰釉陶器
11	なし	陶器
12	土坑・溝	土師器・山茶碗
13	土坑・溝・ピット	土師器・山茶碗
14	土坑・柱列・ピット	土師器・山茶碗
15	なし	なし
16	なし	なし
17	土坑・溝	土師器
18	溝・ピット	土師器・山茶碗
19	—	—
20	なし	なし
21	なし	陶器

調査杭No.	遺構	遺物
22	なし	なし
23	なし	なし
24	なし	なし
25	なし	なし
26	なし	なし
27	なし	なし
28	なし	なし
29	なし	なし
30	なし	なし
31	ピット	なし
32	土坑・ピット	なし
33	土坑・ピット	土師器・黒色土器・山茶碗・陶器
34	なし	なし
35	なし	灰釉陶器
36	土坑・溝	土師器・山茶碗
37	なし	なし
38	ピット	なし
39	溝	なし
40	なし	なし
41	土坑・柱列	山茶碗
42	なし	なし

表9　トレンチ一覧

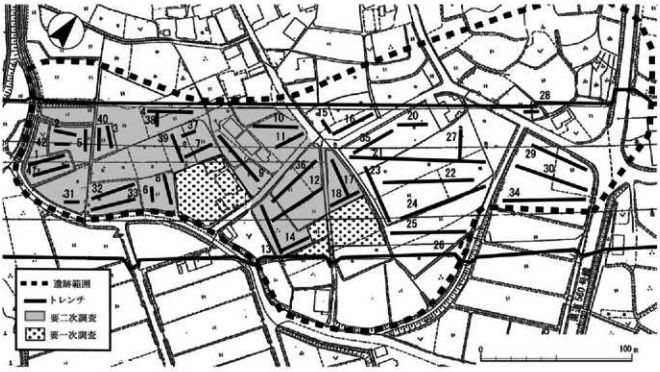


図29　釜垣内遺跡（一次）トレンチ配置図（1：2,500）

14　小社遺跡（一次）

1．はじめに

当遺跡は、鈴鹿市小社町地内、鈴川北岸の扇状地に位置する中世の遺物散布地である。平成19年の分布調査で、遺跡外にも一石五輪塔[1]や井戸を確認したことから遺跡の範囲を拡大した[2]。

鈴川をはさんで南西側に釜垣内遺跡があり、現小社集落の縁辺には東荒野遺跡や神戸遺跡、井領田遺跡など、中世の遺物散布地が所在する。小社遺跡は現小社集落の北側に位置し、遺跡の南側隣接地には慶長年間の開山と伝えられる玉泉寺（真宗高田派）がある[3]。

事業地は、遺跡を東西に横断する。その事業地の東部が今回の調査地で、現況は茶畑である。

2．調査の概要と結果

調査は、幅２ｍのトレンチを16箇所設けて行った。調査面積は、1,020㎡である。

その結果、表土下40㎝～70㎝でにぶい黄褐色粘質土に達し、この上面で土坑や溝などの遺構を検出した。遺構は、調査地の西側部分に集中しており、調査地の東側では確認することができなかった。

遺構の埋土から、16世紀代の土師器や瀬戸美濃、常滑産の陶器が出土した。

以上の結果、遺構・遺物を確認した調査地西側を二次調査の対象とした。なお、事業地の西部に調査未実施地があり、一次調査が必要である。

写真31　トレンチ６（東から）

写真32　トレンチ４（東から）

写真33　トレンチ５（東から）

註

1）現在、一石五輪塔は土地所有者により事業地外に移されている。

2）三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター2007『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）四日市JCT～菰野IC建設予定地内埋蔵文化財一覧』Ⅲ

3）仲見秀雄1983「鈴鹿市」『三重県の地名日本歴史地名大系24』平凡社

トレンチNo.	遺構	遺物
1	なし	なし
2	ピット・溝・土坑	土師器・羽釜 山茶碗・瀬戸美濃・常滑
3	溝・土坑	土師器・羽釜 瀬戸美濃・常滑
4	溝・土坑	土師器・羽釜 瀬戸美濃・常滑
5	溝	土師器・羽釜 瀬戸美濃・常滑
6	土坑	土師器・羽釜

トレンチNo.	遺構	遺物
7	溝	なし
8	なし	なし
9	なし	なし
10	なし	なし
11	なし	なし
12	なし	なし
13	なし	なし
14	なし	なし
15	なし	なし
16	なし	なし

表10　トレンチ一覧

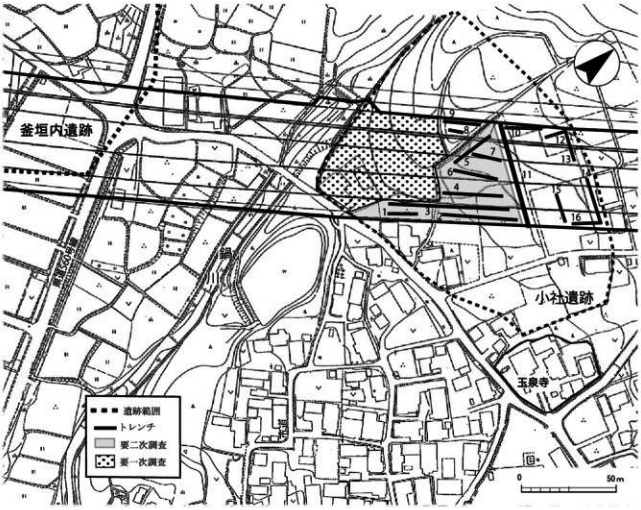


図30　小社遺跡（一次）トレンチ配置図（1：2,000）

報告書抄録

ふりがな	きんきどうしゃどうなごやこうーせん（よつかいちじゃんくしょんふかふかやまにしじゃんくしょん）けんせつじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいほっくつちょうさ概報 に
書名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ
副書名	伊坂城跡（第４次）・中野山遺跡（第４次・第５次）・北山A遺跡（第２次）・筆ヶ崎古墳群（第２次）ほか
巻次	
シリーズ名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	Ⅱ
編著者名	穂積裕昌・岩脇成人・鈴木規之・中村法道・東谷洋平・石井智大・櫻井拓馬・山田猛・服部芳人・水橋公恵
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL:0596-52-1732
発行年月日	西暦2012（平成24）年８月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いさかじょうあと 伊坂城跡	よっかいちしいさかちょう 四日市市伊坂町	24202	429	35° 2′ 22″	136° 37′ 28″	20100809 ～20110114	平成22年度 第４次調査 990	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業
きたやまじょうせき 北山Ｃ遺跡	よっかいちしにしあばねちょう 四日市市西大鍋町 くわなししも 桑名市志知	24202 24205 a	241 154	35° 2′ 56″	136° 36′ 1″	20110711 ～20110909	平成23年度 一次調査 600	
くろぼくいせき 黒土遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	570	35° 2′ 56″	136° 35′ 32″	20100809 ～20100930 20110817 ～20110826	平成22年度 一次調査 580 平成23年度 一次調査 380	
きたやまえーいせき 北山Ａ遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	239	35° 2′ 54″	136° 35′ 20″	20101126 ～20110310 20110118 20111107 ～20120110 20110425 ～20111222	平成22年度 一次調査 950 平成22年度 工事立会 100 平成23年度 一次調査 500 平成23年度 第２次調査 3,760	
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	238	35° 2′ 53″	136° 35′ 10″	20101126 ～20110310 20110425 ～20111222 20110824 ～20120113 20110824 ～20120113	平成22年度 一次調査 1,530 平成23年度 第４次調査 4,000 平成23年度 第５次調査 2,400 平成23年度 一次調査 880	
ふでがさきこふんぐん 筆ヶ崎古墳群	よっかいちしこまきちょう 四日市市小牧町	24202	12～19 236	35° 2′ 59″	136° 35′ 2″	20110920 ～20120131 20110920 ～20120124	平成23年度 一次調査 560 平成23年度 第２次調査 750	
きたやまじょうあと 北山城跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	237	35° 2′ 49″	136° 34′ 47″	20111107 ～20120110	平成23年度 一次調査 630	
こまきみなみいせき 牧南遺跡	よっかいちしこまきちょう 四日市市小牧町	24202	568	35° 2′ 32″	136° 34′ 0″	20120301 ～20120307	平成23年度 一次調査 460	
こやしろいせき 小社遺跡	すずかしこやしろちょう 鈴鹿市小社町	24207	1153	34° 57′ 10″	136° 27′ 23″	20111024 ～20120217	平成23年度 一次調査 1,020	
かまいないといせき 釜垣内遺跡	すずかしおがすちょう 鈴鹿市小岐須町	24207	1032	34° 57′ 0″	136° 27′ 12″	20111024 ～20120217	平成23年度 一次調査 2,300	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊坂城跡	城館跡	古墳・古代・中世	なし	土師器・須恵器・中世土器・陶器	
北山Ｃ遺跡	包蔵地	弥生時代後期以降	溝・土坑	須恵器・土師器	
黒土遺跡	包蔵地	－	なし	なし	
北山Ａ遺跡	集落跡	弥生・飛鳥・奈良	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	弥生土器・土師器・須恵器	
中野山遺跡	集落跡	縄文・弥生・飛鳥・奈良	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	
筆ヶ崎古墳群	古墳・集落跡	古墳・奈良	古墳・竪穴住居・鍛冶炉	金環・須恵器・土師器・鉄滓	
北山城跡	城館跡	古代・中世	溝・ピット	土師器・須恵器	
小牧南遺跡	包蔵地	縄文・古墳	竪穴住居・溝・土坑・ピット	土師器・縄文土器	
小社遺跡	包蔵地	中世	土坑・溝	陶器	
釜垣内遺跡	包蔵地	中世	土坑・溝	土師器・陶器	

要　約	【伊坂城跡】明確な遺構は確認できなかった。ただし、調査区内に残存する曲輪状のテラスは自然地形と推測されるが、城郭に取り込まれていた可能性は否定できない。少量の中近世遺物のほか古墳期遺物も出土した。
	【北山Ｃ遺跡】古墳または方形周溝墓の周溝の可能性がある溝が確認された。
	【黒土遺跡】少数のピットや溝を検出したが、近世以降か木の根や動物の巣穴痕跡の可能性が高い。
	【北山Ａ遺跡】飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居15基、掘立柱建物１棟が確認された。
	【中野山遺跡】縄文時代早期の竪穴住居４基・炉穴43基（集石炉４・煙道付炉穴39）、縄文時代中期の竪穴住居２棟、縄文時代晩期の土器棺、弥生時代中期の土坑、飛鳥時代の掘立柱建物、竪穴住居などが確認された。
	【筆ヶ崎古墳群】７世紀前半頃に築造された疑似両袖式の横穴式石室をもつ円墳２基と、奈良時代の竪穴住居や土坑などが検出された。竪穴住居のうち１棟の内部には鍛冶炉が２基存在していた。
	【北山城跡】頂部に３ヶ所、斜面に４ヶ所、斜面中腹の平地に１ヶ所、平地に３ヶ所トレンチを入れた。その結果、頂部の台地で溝、ピットと竪穴建物、斜面でピット・溝、斜面中腹の平地で土坑が確認された。
	【小牧南遺跡】古墳時代の竪穴住居跡・溝状遺構・土坑・ピット、縄文時代の埋設土器を確認した。遺物は土師器片が多く古墳時代のものが大勢を占めるが、縄文土器も出土した。
	【小社遺跡】16箇所のトレンチを設けて遺構・遺物の有無についての調査を行った。その結果、Ｔ１～７の各トレンチで土坑や溝を検出した。遺構の埋土中には、16世紀代の土器・陶器が認められた。
	【釜垣内遺跡】41箇所のトレンチを設けて調査を行った。その結果、19箇所のトレンチで溝や土坑などの遺構や遺物が検出された。遺構は、調査地の西部を中心に分布している。

近畿自動車道名古屋神戸線
（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ

２０１２（平成２４）年８月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社

筆ヶ崎古墳群ＳＨ２鍛冶炉